

ダンベルギアの街を目指して四日目。

あたしはオアシスを転々としながら砂漠を渡っていた。

そのはずだったんだけど……。

「あっちゃく。道に迷ったかなあ？」

そもそもこの砂漠しかない世界に道なんてない。

右を見ても左を見ても砂の海。空と砂の地平線には陽炎が揺れに揺れている。

どこを見ても同じような景色が広がっているだけだ。

あたしが居たウインドミルという村から、次の目的地であるダンベルギアの街まで、およそ三日で着くとのこと。

もちろん。砂漠を徒歩で超えることを前提とした日数だ。この世界のほとんどが砂漠なんだからそれは当然のこと。

問題は歩き続けて四日目に突入してしまったことだ。

ウインドミルからダンベルギアまでは四つのオアシスが確認されている。村を出て一日に一回以上立ち寄れるはずなのに、

あたしが立ち寄ったオアシスは一日目の一回のみ。残り三つのオアシスに出会えぬまま、四日目に突入してしまったのだ。

砂漠は歩行を妨げ、方向感覚も狂わせる。それにこの暑さは体力を奪い、頭の回転も鈍くさせる。

つまりは道に迷ったのも仕方が無いということになるのかな。しかしこのあたし、シノ||カズヒは『砂漠のアメフラシ』と

呼ばれるほどの女だ。砂漠の旅は慣れたもの。

道に迷ったくらいどうとことはないはずだ！

この前も道に迷ったけどなんとかあったしね！

「ルルルルウウ」

腰のベルトにはバッグがある。その中からルルが喉を鳴らす声が聞こえる。

バッグのボタンを外すと、ルルは勢いよく飛び出してあたしの肩に飛び乗った。

「ルッ！」

ルルは砂漠に生息する砂竜（さりゅう）アルファアルファの子どもだ。黄土色の肌にエメラルドグリーンの瞳がすごくキュート。鳴き声も「ルルル」とカワイイから、ルルという名前をあたしが付けてあげたんだ。

ホントに可愛い。思わず頬ずりしたくなるほどに。

「イタタタッ！ 噛むな噛むな！」

「ルルウ？」

頬ずりするとホッペを噛んできた。もちろん甘噛みなんだけど、ザラリとした舌の感触がチクチクする。

これだけ人間に懐くアルファアルファも珍しい。

砂竜アルファアルファは群れで生活する砂漠のドラゴン。

その子どもであるルルは自分のいた群れからはぐれてしまったらしい。言わば迷子だ。

他のアルファアルファを見つけても群れに加わろうともしないし……お母さんを探してるのかなあ？

砂竜アルファアルファは知能が高いと言われている。

ここは一つ、ルルに道を聞いてみよう。

「ねえ、ルル。ダンベルギアの街がどこにあるか分からない？」

「ルッ？」

「あはは。道わかんなくなっちゃったんだ」

「ルウーッ！」

べこちんっ！

「ばふっ！」

ルルの尻尾があたしの額にめり込んだ。

その尻尾は鉄球のように硬い。ルルはたまたまにこんな強烈なツコミを入れてくることがある。

……あ、コブができてる。

「いたたたたあゝ。わかったわかった！ あたしが悪かったよ。」

謝るからその砂竜パワーでダンベルギアの道を教えてよお」

「ルル、ル……」

「なによその『あるかそんなもん！』って目は？」

「ルルルウ！」

あたしの言葉に反感の声を上げつつ、尻尾を振り回して二発目のツツコミを脅迫するルル。さすがに次は額が陥没しかねないぞ。

「ごめん。尻尾は勘弁して！ 尻尾は！」

「ルウ、ルルル……ルツ！」

ルルはブンブン回していた尻尾の回転を止めると、あたしの首に尻尾を巻きつけてきた。種族は違うけど仲がいいんだ。あたしとルルは。

しかしこういったやり取りができる砂竜アルファアルファはホントに知能が高い。まさか尻尾をツツコミ用にぶん回すなんて思いもしなかったけど。

「ルルウー！」

耳元でいきなり声を上げるルル。

よーし分かった。分かったから首は絞めないで首は。

「ケホッ。なにになに？」

「ルーツ！」

ルルの視線の先を見ると、ルルの同族、アルファアルファの群れがその大きな翼を広げて砂漠の上を飛んでいた。

全長およそ3メートルの成体だ。ルルはこんなに小さいのに。成体ともなるとドラゴンって感じがするなあ。

「お仲間だね、ルル」

「ルツ！」

「キミのお母さんはあそこにいるのかな？」

「ルー、ルルウ」

ぷるぷると首を振ってそれを否定するルル。やっぱりあたしの言うこと分かってるみたい。まだこんな小さいのに、ルルはすごいなあ。

「つとお！ ちょっと待ってよ？ アルファアルファは人間と同じ環境を好むんだよね。オアシスでもよく確認されているし。……ってことは！ あの群れについていけば人のいるところに行けるかも！」

「ルルウー！」

「そっかあ。ルルはそれが言いたかったんだね」

「ルツ！」

「よしよし愛いやつじや。褒めて遣わすぞ」

指でルルの頭をコリコリと撫でてあげる。

嬉しいのか気持ちいいのか、ルルは目を閉じて喉を鳴らす。

「ルルン♪」

「可愛いもう。よしよし♪」

あたしはルルに限らず砂漠のドラゴンたちが好きだ。もちろんルルは格別に好き。愛嬌があつてお利口だしね。

「さあ、そうと決まればさっそく行くよ！」

「ルツ！」

四日も砂漠を歩いていてほとほと疲れていたけど、元気が出てきた。

幸いにもあのアルファアルファの群れはゆっくり飛んでいる。

散歩中なのかな？ いや、歩いてないから散空中かな？

とにかく、このままアルファアルファの後を付いて行けばなんとかなりそうだ。

「行こう、ルル！」

「ルーツ！」

アルファアルファを追って砂漠の上をひたすら走った。

歩きづらいということは、走りづらいということでもあるんだけど……。なぜだろう、ちつとも苦じやないや。

世界はこんな砂漠だらけだけど、それでもあたしの知らない世界があるんだ。

世界を知ること。それはとても楽しいものだとある人に教えてもらったことがある。その影響かもしれない。

この先にダンベルギアの街があるかもしれない。

あたしの知らない何かがきつとある。そう思うと楽しみでウキウキが止まらなかった。

「あっ！ 街だ！ きつとダンベルギアだよ！」

陽炎が舞う地平線の向こうにそれらしい建物が見えてきた。

アルファアルファもおおよそその方角に向かっている。

「さすがルルだね！」

「ルーツ！」

「でも蜃気楼じゃないよね？」

「ごちいん！ とルルの尻尾があたしの後頭部に直撃した。

うん、とりあえず夢や幻じゃ無さそうだ。代わりに目がチカチカして星が回りそうだけど。

「この確認方法は止めてくれる？」

「ルゥ？」

蜃気楼は追っても追っても追いつけないものだけど、目の前の街は次第に大きく近くなっていく。

それでもさっきまで地平線だった所だ。かなり遠いのは間違いない。けれど砂漠の旅にとってこれほど嬉しいものはない。

もうすぐ街に着くというところで、あたしはルルをベルトのバッグに戻した。さすがに街の中でルルを見られるのは好ましくないから。

あたしはくるりと後ろを振り返った。

そこにはこの街まで導いてくれたアルファアルファの群れが空を舞っていた。

「ありがとー！ アルファアルファー！」

手を振ってそう叫ぶと、少しの間を置いてアルファアルファの鳴き声を耳にした……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：！

砂竜アルファアルファ。人間のあたしとは種族が違うけど、仲良くやっていけそうだね！



ダンベルギアの街は他の街と同様にオアシスを中心として人や街が栄えていた。

この街の中にあるオアシスは三つ。そのうち一つが街の中心に大きく構えている。なかなか大きな街だ。

まだ街の人と話もしていないのに、この街がダンベルギアだと分かったのは単純。店の名前が全部ダンベルギアだからだ。

フルーツダンベルギア。ダンベルギアバー。雑貨ダンベルギア店。もしかしたら地主の名前がダンベルギアでそこから取っ

ているのかもしれない。

ダンベルギアの街についてすぐに、あたしは笛の音色を耳にしていた。

「これはどこから聞こえてくるんだろう？」

「ルルルルウウ♪」

「ルルにも聞こえるんだね」

途中で見つけた酒場で足を休めたかったけれど、この笛の音も気になる。宿屋の場所もまだ分からないし、探しがてら笛の音色を辿っていくことにした。

それにしても、さすがはダンベルギアだ。噂どおりの巨大な規模の街だ。

街の中は人で溢れかえっている。市場の通りなんかは人とすれ違うのも大変なくらいだ。

溢れんばかりの人ごみに揉みに揉まれてしまった。

腰に提げている刀が人にぶつかからないようにしっかりと手にし、もう片方の手はルルが潰されないようにバッグを庇っている。

「ふう、これは大変だ。ルル、大丈夫？」

「ルルルウウ♪」

この世界では人が住める場所が限られている。こういうオアシスを抱えている街にはたくさんの人がいるのも当然だ。

この街もインフィニットが管理しているんだらうか。

砂漠の世界を統治する組織、インフィニット。

人類の救済を掲げて活動しているけれど、あたしから見ればあの組織は――――。

「ルウ♪」

「うわっ、びっくりした！」

「ルルウウ♪」

ベルトのバッグから聞こえるのはルルの鳴き声――というよりも歌のようだ。こんなことは初めてだ。砂竜アルファアルファは歌まで歌えるのだろうか。

「ねえルル。歌うのって初めてじゃない？」

「ルルルウウ♪」

ルルの声と一緒に笛の音色も聞こえてきた。

「あ。あそこだ！」

街の大きな広場を前にして、あたしはやっと笛の音色がそこから聞こえてくるのが分かった。

広場のほとんどがオアシスできていて、所々に緑が生い茂っている。

居心地がいいのだろう、ここにもたくさんの人がいる。

その広場の中心付近の盛り上がった丘の上で、少女が目を閉じて笛を吹いていた。

耳を澄ませて聞くと上機嫌に歌うルルの気持ち分かる。

心がやすらぐ。穏やかに満たされていく。癒されていく。嬉しい気持ちになる。いつまでも聞いていたくなる。そんなプラスな感情が後から後から溢れてくるんだ。

広場に集まっている人たちの顔を見てもそうだと思う。この音色に心を癒しに来ているんだ。

「ルルッ！」

「あっ、ルル！ コラあ！」

ごそごととバッグの中で動いていたルルはどうとう外へ飛び出してしまった。

ルルが向かうのは丘の上で笛を吹く少女。

あたしも急いでルルを追った。

「ルッ、ルルウゥ♪」

丘の上にいる少女を前に歌うルル。

この光景を見ると別の世界に来てしまったと思ってしまう。

笛を吹く少女はとても可愛く、ルルと一緒にいる様はまるで妖精のようだ。

「……るるる？」

少女はルルの歌に気づいたらしく、笛を吹くのを止めて目を開けて辺りを見回した。

が、見つけられない様子だ。

ルルはすぐそこにいるのだけど、小さくて見えないのかもしれない。

あたしはいそいそと少女に近づくと声をかけた。

「こんにちは。いい音だね」

「えっ……？」

あたしの声に顔を上げる少女。うん、やっぱり可愛い子だ。

「初めて聞いたんだけど、感動しちゃったよ」

「あ、ありがとう」

「街のみんなもキミの笛の音色を聞きに来てるんだね」

「ふえ？ そうなの？」

自覚が無いのか、首を傾げてげいる。

辺りを見ると演奏を中止したことでこの子に視線が集まっていた。それも次第に無くなると、笛を鳴らしていた時と変わらぬ振る舞いでそれぞれの用事に戻っていた。

「わたし、人よりあまり目が見えないの」

確かに女の子の顔はあたしに向けられているけど目はあたしを探しているみたいだった。

「そ、そうなんだ。ごめんね」

「なんで謝るの？」

「そりゃあ、だって……ね」

これはまずいことしちゃったかな？ しかし、気まずそうに頭を掻くあたしに対し、彼女はきよとんとした顔をしていた。目が不自由なことがもう当たり前になっていくのかもしれない。それなのにこれだけの音色を奏でることができるなんて、やっぱりすごいことだ。

「あたし、シノって言うんだ。シノⅡカズヒ」

「わたしはロメリアⅡアルストロです」

「おっ。いい名前だねえ」

「ふえ？ほんととお？」

本当に嬉しそうな顔で笑うロメリア。

この裏表のない笑顔は素敵だなあ。この砂漠だけの世界では特にそう思える。

「そういえばさっき動物の声がしたんだけど。何だか歌ってるみたいだったような……」

「ああ。それ、ルルだよ」

「ルル？」

あたしはルルを持ち上げると、ロメリアの目の前に持ってきた。普通はそれだけで驚きそうだけど、目の不自由なロメリアは逆に目を細めて見ようと努力していた。

「トカゲ？」

「ルー！」

「あ、喋った！」

「ルーはアルファアルファなんだよ。砂竜の」

トンツとロメリアの肩に飛び乗るルー。

なんだか今日のルーは遠慮がないなあ。

「わっ！ あはは、くすぐったいく」

首の後ろを行ったり来たりするルーに、ロメリアは身じろぎながらくすぐったそうに笑った。

ルーもルーだ。あたし以外の人間にこんなにも懐くのは珍しい。なんだかちよつと、嫉妬しちゃうなあ。

「ロメリアはどのくらい見えるの？ あたしの顔はわかる？」

「うーん。その時によって違うかなあ。お姉ちゃんの顔はこれくらい近づいたらわかるけど……」

そう言っただけであたしに顔を近づけるロメリア。かなりの近眼みたいだ。他の男の人にやったら誤解されてしま

まいそうなくらいに。

「普段は声と雰囲気でなんとなく分かるよ」

「ロメリアは砂漠を旅したことある？ 日の光で目をやられることもあるみたいだよ」

「ううん。あたしは旅なんてしたことないよ」

「そっかあ。ロメリアは目が不自由なこと、なんともないみたいだね」

「うん。もう慣れちゃったからね」

ロメリアは元気に頷いてみせると、またあの裏表の無い笑顔を見せてくれた。

ロメリアにとって目が見え難いのは当たり前のこと。それに悲観しないのがロメリアのいいところなんだなあ。

場所によっては水や食料を奪い合うこともあるこの世界。

そんなことすらも忘れてしまいうくらい、ロメリアの笑顔はとても素敵だった。

どんな世界でも、そこで幸せだと思える人が本当に幸せになれるって、あたしの知る人は言っていた。ロメリアを見ているとホントにそうだと思う。

「ルー？」

ロメリアの腕を辿って手にある笛をカプリと啜えるルー。

「コラッ。ダメでしょルル！」

ルルをロメリアから離してみるものの、尚も口から笛を離そうとしない。

アルフアルファが歌うなんて聞いたことないけど、笛を吹くなんて尚更聞いたことが無い。

「えいつ！」

「ギョルル！」

ルルの口をこじ開け、ロメリアの笛を取り返す。よく見るとこの笛、変な形をしてるかも。

「ごめんね。はい、ロメリア」

「あ、ありがとう」

しっかりとあたしから笛を受け取るロメリア。

その自然な振る舞いを見てみると目が不自由だとは思えないくらいだ。

「それにしても変わった笛だね。あたしは筒状の笛くらいしか見たことないや」

「そう？　これはね。オカリナって言うんだよ。この先に口を当てて、穴を指で塞ぎながら吹くの」

そう言つてオカリナを吹くロメリア。

ピーツツという音を鳴らした後、さっきのように色んな音を奏でてみせる。

やっぱり不思議。笛の音色がこんなにも心地よいなんて。

「ルルルウ♪」

砂竜アルフアルファの子であるルルもあたしと同じ気持ちなのかなあ。

ロメリアの笛の音色には種族も人種も飛び越えて聞き入ってしまうのかもしれない。

もしかしてルルも吹いてみたのかな？

「ふいふ。ちよつと疲れちゃった」

額の汗を拭うロメリア。それでも後から後から汗が浮かんでくる。いくら水のあるオアシスのそばに居るといっても、この日差しと高い気温は変わらない。

特にロメリアは小さい女の子だ。疲れもするよね。

「よし。あたしに任せて」

「お姉ちゃん？」

後に回してある愛刀を取り出し、ロメリアから少し離れた。刀の名前は水御華（すみか）。鞘の名前は沙華月（さかづき）。実はちよつと特殊な刀なのだ、これは。

「水御華。その名の如く、水を散らして華と成れ！」

鞘から刀を抜くと、独特の抜刀音と共に刀から水が噴き出す。そのまま空を薙いで、ロメリアの周りに水を散らした。

次第に空気が冷えていくと、あたしたちの周りに涼しげな風が吹いてきた。

「すごい！」

「どう？ 涼しくなったかな？」

水を生みだす刀。それがこの水御華の力だ。あたしの父さんが作ってくれたこの世に二つと無い一振り。

ひとしきり水を振り撒いた後、水に濡れた水御華を拭いて鞘に納めた。

「お姉ちゃん。もしかして——」

「うん？」

「水の妖精さん？」

「あははは。そんな風に言われたのは初めてだよ」

砂漠のアメフラシとなら言われたことあるけど、水の妖精なんて例えられるなんて思わなかった。

そんな上等な生き物じゃないよ、あたしは。顔も普通だし。ロメリアの方が可愛いもん。

「あたしはロメリアの方が妖精に見えるよ。可愛いし、笛の音色に心を奪われちゃうし。風の妖精かと思った」

「そんなことないよお。でもどうやって水を降らせたの？ バケツに水を汲んでおいたの？」

「∴∴それ、なんて罰ゲーム？ それだと水浸しになるよ」
そっか。これくらい離れただけでもうロメリアにはよく見えていないんだ。

「じゃあ、どうやったのお？」

あたしの刀、水御華は水を出すことができる∴∴なんて言うて信じてもらえるかな。

水の妖精だと言ってくれるロメリアなら信じてもらえそうだけど。

「あのね。実はこの刀——」

「ゲヒヒッ！ 見たぞ見たぞおく！ お前、剣から水を出しやがったな！」

言おうとしていたセリフを取られ、あたしは口をパクパク動かした。

後を振り返ると眼帯をした男があたしを指差しながらこっちに向かつて来ていた。

あっちゃあ。あれはどう見ても野盗だ。

水を出せると知って見世物小屋にでも売りつけようとか思ってるのかなあ。

火とか雷が扱えるなら魔法のように神秘的に見えるのに、水だとどう見ても水芸だもんなあ。この世界じゃ貴重だけど。

「ゲヒヒ。オイ、今よ。剣から水を出したろ?!」

あたしの前に立つと、また同じ言葉を繰り返す野盗のおじさん。さて、どうしたもんか。

「えーつと。水なんか出してないよ？」

「ゲヒヒ。鳥がションベンでもしたってかあ？」

「あ、じゃあそれで！」

「じゃあそれで、じゃねえ！ 誤魔化せると思うなあ！」

顔を真赤にして声を荒げる野盗のおじさん。この手の輩は短気だから困る。もう少し融通を利かしてくれてもいいのになあ。

「あたしをどうするつもりなのさ？」

「ゲヒヒッ。丁重にもてなしてやるさあ」

「へえ。腰でも揉んでくれるの？」

「揉むかあ！ 賞金付きの異能者ならインフイニットに引き渡してやるのよう！」

「ただの水芸人だったら？」

「見世物小屋に売り飛ばす！」

——やっぱりそうなるのか！
たまには女の子らしい扱いを受けてみたいものだ。刀なんて振り回してるから無理なのかなあ、やっぱり……。

「お姉ちゃん……」

ロメリアはあたしの裾を引っ張ると不安そうな顔で見上げていた。

そうだった。こんなことにこの子を巻き込むわけにはいかないんだ。

「大丈夫だよ。悪いヤツは倒されるものなんだから。ねえ？」

「テメエ……俺に聞きたあ、いい度胸だな」

「度胸なんて関係ないよ。ただ、悪を許しちゃいけないってのはあたしの師匠の口癖だからね！」

師匠というより……いや、今はそんなことはどうでもいいか。

あたしは刀の柄を握ってロメリアから離れた。

それに威圧を感じたのか、数歩下がる野盗のおじさん。慌てて腰の剣を引き抜き、切っ先をこちらに向けてきた。

構えは普通。剣の心得は無さそうだけど、容赦なく人を斬ってきたのはなんと分かる。

それでも強そうに見えないのはその実力が大したことないという表れかもしれない。それでも油断はしないようにしよう。

「ゲヒヒ。八つ裂きにされなきや分からねえらしいなあ！」

広場にいる街の人たちもざわめき始める。

女の子が野盗に襲われているというのに誰も加勢しようとなない。何だかシャクだけど、今の世の中じゃ当たり前か。

自分の身は自分で守る。それができなければ死ぬだけ。

そう、死ぬんだ。あたしの両親はそうやって殺されたんだ。

「ゲヒヒッ！ 死ねええ！」

「誰が死んでなんかやるもんか！」

野盗はあたしの心臓に向かって剣を突き出してきた。容赦と
いうものを知らない野盗らしい一撃。

その一突きを右へ避けると、それに反応して横へと薙いでくる。思ったよりはできるようだ。

刀を抜いてそれを受け止める。が、手応えが薄い。

今のはフェイントだったらしい。野盗はすぐに剣を引き、突きの構えを取っていた。

「殺（と）ったあ！」

得意げな顔であたしの首元へ剣を伸ばす野盗。

「取ったのは——」

キインッ！

「こつちだあ！」

刀を振り上げて野盗の剣を弾き飛ばした。

宙を舞った野盗の剣はクルクルと回転しながら野盗の後へ弧を描いて飛んでいった。

しきりに両手を交互に眺める野盗のおじさん。

事の顛末が飲み込めた時には驚愕の声を上げていた。

「し、ししし信じられねえ！　なんだこの強さは？！」

あたしとしてはまだぜんぜん本気じゃなかったんだけど……。

あつちはどれだけ悪事を働いてきたか分からないけど、実戦という場数ならこつちだつて負けていない。

異能者という狙われる側の人間だからね。

「まず自分の弱さを信じたら？」

「んだとお！」

よくいるんだ。弱い相手とばかり戦って自分が一番強いと信じて疑わない人間が。

あたしは自分より強い人を知っているけど。

井の中の蛙だと知らないでゲロゲロ喚いてるだけじゃ強くはなれないのさ。

「あたしは殺そうなんて思わないから。とつとと逃げてよね」

「お、俺を馬鹿にするのか？！」

「負けたら命を奪われても文句は言えないんだよ？　殺されるより逃げる方が利口だと思っけど？」

「ゲヒヒ。俺は弱くなんかねえぞ。ここいらで一番の野盗だと評判なんだ」

野盗から野盗の評判を聞くことになるとは思わなかった。

この辺りで一番つてなんだろう。減らず口とかかな？

「自慢することじゃないと思うけどなあ」

「それが誇りつてもんだ。だから逃げるくらいなら……」

野盗は懐から黒くて丸い爆弾を取り出してきた。

紐の先端を引っこ抜くと火花が散り、紐に火が点いた。

「全部ぶっ飛ばす！」

「ちよ、ちよつと！　そんなことしたら自分も死ぬんだよ？！」

街の人たちも、大事なオアシスも！」

その目は本気だ。本気と言うより半ばヤケになっている。

あたしは急いで刀を納めた。

これはとんでもないことになってしまったぞ。

「構うかあ！ みんなおしめえよお！」

「ちっ！ この分からず屋め！」

「ゲヒヒ。無駄だあ！ あと5秒で爆発すんぞお！」

水御華の柄を強く握ると、あたしの力が刀へ移っていくのが分かる。急激な力の移動に頭がクラツと揺れたけれど、今はそんなことを気にしてられない！

ロメリアの住むこの街を壊されてたまるもんか！

「水よ、地を走れっ！」

鞘からの抜刀と共に水御華で地面を斬る。

するとそこから地面を裂いて水が駆け抜けた。

「な、なんだあ？！」

水が野盗の足元まで来ると上に大きく噴出し、爆弾の火を鎮火させると共に野盗の体を大きく吹き飛ばした。

「げげえええっ！」

ずぶ濡れになって地面を転がる野盗のおじさん。鎮火した爆弾もゴトンツと地面に埋まった。

一瞬のことで何が起こったのか分かっていないのか、野盗のおじさんはそのまま目を瞬いてあたしをボーっと見つめていた。

「………」

「………」

しばらく見つめ合うあたしたち。

異様な雰囲気顔に顔をしかめて見せると、野盗のおじさんはニヤリと顔を歪ませた。

「そういうつもりで見つめてたんじやないんだけどなあ。」

「み、みみみ見たぞお！ やっぱり水を出しやがった！」

あたしと水御華を交互に指差し、次に自分の剣を探して立ち上がる野盗のおじさん。

「覚えていろよ。お、俺の百人の仲間が黙っちゃいないぞ！」

「黙ってたらしいのに」

「ゲヒヒッ……」

不気味な笑いを残して、野盗は自分の剣を拾って行ってしまった。

百人の仲間がいると言ったけど、信じられない話だ。そんな大人数の野盗がこの街のそばに潜んでいるなんて思えない。

そう普通に考えればわかること。

そうだとこの街の人たちは野盗の言うことを間に受けてしまっていた。

「あ、あんた。異能者だったのか?!」

「余所者が、余計なことをしやがって!」

「俺たちは関係ない! 関係ないぞ!」

ぞろぞろと広場から人が消えていく。

あたしから逃げるように。侮蔑を含んだ目を向けながら。

水を操る異能者。それが砂漠のアメフラシと呼ばれるあたし。

シノ||カズヒの正体だ。

「ふう。ま、仕方ないか…」

水御華を鞘の沙華月に納刀し、ギョツと握り締めた。

——こんなこと慣れてるはずなのに、やっぱり胸が痛いや。

どんな悪いヤツを倒しても、あたしが異能者であることに変わりはないんだ。

「…お姉ちゃん?」

その声に振り返るとロメリアがあたしを見ていた。さっきと変わらぬ笑顔のまま…。

「何があつたの?」

そっか。目の不自由なロメリアにはあたしのしたことがその目には映らなかつたんだ。でも、街のみんなの声は聞こえていたはずだ。

「聞いた通りだよ。あたしは異能者なんだ。刀から水を出すことができないんだ」

世界のほとんどが砂漠化して百数年。砂竜アルファルファのような異形の生物が生まれた。そして人間も特殊な力を持つ異能者が生まれるようになった。

異能者はインフィニットから追われ、人々の差別の対象となった。あたしもその異能者の一人だ。

それで苦労することもあるけど、今は何とも思わないや。

「わたし、見たんだよ」

「…なにを?」

キラキラした目をあたしに向けるロメリア。

そこには差別も侮蔑もない。

会ったころと変わらないままのロメリアの笑顔だ。

「お姉ちゃんが何かしてる時にね、水が飛んできたの」

「あ、ごめん。冷たかった？」

「ううん、そうじゃないの」

水御華の力を開放すると、抜刀の鞘走りでも水が吹き出ることがよくある。

そのしづきがロメリアにまで届いていたのかもしれない。

「目の前にね。キラキラした光が見えたのお。青や赤や……いっぱい色があっただよ？」

「ロメリア。それはきっと虹だよ」

「虹い？」

雨上がりに見られるという多彩な色が一本のアーチになって空に掛かる現象。こんな世界じゃまず見られることのない貴重なものだ。

空気中に水をかけてやればたまに見ることもできるけど、この世界において水は貴重なもの。そんな機会は少ない。

……そっか。ロメリアは本物の虹を見ることができないんだ。

それこそ今のような間近でない限りは。

「虹が見えた時、お姉ちゃんが光って見えたよ。お姉ちゃんはやっぱり水の妖精かもしれないね！」

ロメリアの笑顔と言葉が、あたしを嬉しくさせた。

さっきまで悩んでいたのが嘘みたいだ。

たった一人でもあたしのことをそんな風に思ってくれる人がいるのなら、それだけで充分だと思える。

「いつか、ロメリアの目が治ったら虹を見に行こうよ。本物の虹をさ」

「治るかなあ？」

「世界は広いから。いいお医者さんが見つかるかもしれないよ」

「うん！ 見てみたいね！」

それを可能とする異能者も……あたしの中ではこの意味合いの方が強かった。

インフィニットはこの世界に異能者は邪魔なものだとして淘汰しているけど、それを逃れて身を隠している異能者も大勢いる。中にはロメリアの目を治せる能力を持つ人もいるかもしれない。心当たりも無くはない。

それに本物の虹だってきつとどこかで見ることができははず

だ。こんな砂漠だけの世界だけど、ロメリアの願いくらいは叶えてあげたいなあ。

ぐぐうう、ぎゆるるるる…

「あつ、ルルが鳴いてるよ！」

「いやあ、今のはお腹の音だよ」

空腹なのをすっかり忘れていた。

体を動かしたせいとか、猛烈な空腹感が押し寄せてきた。

「そうか、しまった！　ルルの鳴き声だって誤魔化せばよかったんだ」

「ルーッ！」

ごっちいんっ！

ルルの丸い尻尾があたしの額にブチ当たった。

人のせいに…いや、竜のせいにするなど怒っているのかもしれない。

それにしてもいつの間にか人の肩に乗ったんだらう。

「妖精でもお腹減るの？」

「妖精じゃないって」

きゆるるるる…

今度はロメリアの方から空腹音が聞こえた。

あたしたちはもう少し女の子らしさってやつを学んだ方がいいのだろうか。

「ロメリアもお腹が空いたみたいだね？」

「に、人間なもの！」

ちよつと恥ずかしそうに訴えるロメリア。

それがなんだか可愛い。

「人間だものねえ。じゃあどこかに食べに行こうか。…あ、

でもさっきの騒ぎで食べ物にありつけるかなあ」

異能者と知って態度が変わるなんてよくあることだけど、物を売ってくれなくなったりするから不便なのだ。

「わたしがお世話になつてる宿屋があるんだけど。お姉ちゃんそこに来ない？」

「お、営業してるねえロメリア。異能者だって知られてなきやいいけどさ」

「大丈夫だよ。おじさんはとおーっても優しいんだよお？」

優しいおじさんと言われると、丸いメガネを付けてて常にニコニコしているイメージが浮かんでくる。

そんな優しいおじさんなら大丈夫かも。

「ロメリアがそこまで言うなら……」

「わあい！ こっちだよー！」

ロメリアは嬉しそうに笑うとあたしの手を引いて宿屋に案内してくれた。目が不自由とは思えないほど軽快な足取りだ。

ロメリアの言うとおりに、きつといい人が経営している宿屋に違いない。

あたしも気分よくロメリアの後を着いて行くことにした。

▽△

それは開口一番に飛び込んできた。

「異能者なんざお断りだっ！」

ギリリとした鋭い目つきであたしに言い放つ宿屋のおじさん。店に入った瞬間にこれだ。あたしの噂、どこまで広がってるんだろう。

おじさんには聞こえない声でそつとロメリアに耳打ちする。

「ロメリアさん。話が違うんじゃないですか？」

「おじさんは優しいよう」

「いや、そっちの話じゃなくてね？」

ロメリアの言う優しいおじさんが最初から異能者お断りを掲げてくるとは思わなかった。

これで本当に優しいおじさんなんだろうか。

「なにをごちゃごちゃ言ってるやがる！」

「い、いえ。こっちの話です。はい……」

このおじさん。宿屋じゃなくて兵隊か自警団にでもいる方が似合うんじゃないだろうか。そう思うくらい体格がいい。

服の下に見える傷だらけの体や、左腕にデカデカと付けられた斬り傷を見てもそう思う。

ロメリアは見えてないだろうけど……。ひよっとして騙されてるんじゃないかな？

カウンターの前の席でやっと足を休めることができたあたりは、意地でもここを動きたくなかった。

「あ、あたしは異能者じゃないよ！ 人違いだと思うなあ」

「今日来た余所者はみんな異能者だと思うことにした。今決めたんだ。第一、ロメリアと一緒に居たって情報だぞ」

うっ……それを言われたら弁解のしようがないじゃないか。

今日ダンベルギアを訪れる旅人さんたちには悪いことをしたなあ。

「ブレンおじさあんっ！ お姉ちゃんは水の妖精さんかもしれないんだよ！」

ブンブンと腕を振って講義するロメリア。

なんでロメリアはこんな頑固なおっさんというんだろう。

「水の妖精がこんな汚い格好してるわけねえだろ」
「ううっ」

砂漠を渡ってきたばかりだから仕方がない。

よく見えていないロメリアにはあたしがどれだけ汚れているか分からないんだろう。四日も砂漠を歩いたもんだから、頭から砂を被っているに等しい。

「とにかくお断りだ。さあ、帰った帰った。ロメリアは仕込みの手伝いをしてくれよな」

「ぶうっ。おっじくさくあーんく！」

頬を膨らませて抗議するロメリア。

この可愛らしい素振りにあたしも宿屋のおじさんも萌えざるを得ない。

「し、仕方ねえだろう。こっちは商売なんだ。妙な噂を立てられちゃなんねえ。宿屋は旅人が安心して立ち寄れる憩いの場なんだからよう」

「でも、お姉ちゃんは……」

「だからそんな顔するなよなあ。俺は別に、その、なんだ……」
しゅんとなるロメリアに言葉を詰まらせるブレンのおじさん。
さすがの頑固親父もロメリアには弱いと見える。

でも、このおじさんの言うことは理に適っている。
それにロメリアが慕っているのも分かるし。決して悪い人じゃないんだと思う。

「それに今、すげえ美人を泊めてるしな。お前さんと違って――口は悪いけど。」

くそおろ！ あたしは別に自分が可愛いとか美人だなんて思
い上がったことなんてないけど！ 面と向かってそう言われる
のはムカツとくるなあ！

「いいよ、ロメリア。おじさんの言うことは正しいから」

あたしはなるべく笑顔でロメリアにそう語った。多少引きつ
っていたかもしれないけど。

「お姉ちゃん……」
不安そうな顔をするロメリアに笑ってみせるあたし。

この顔がどこまで見えているのかは分からないけど。ロメリ
アにそんな顔は似合わない。

「じゃあ何を当てるね」

それに異能者だと知って態度を変える人は今まで幾らでも見
てきているし。慣れたものだ。

「――待ってっ！」

「えっ？」

席を立つあたしを止めたのはおじさんだった。

腕組みをしていた太い腕はいつの間にか離れ、気まずそうな
顔で頭の後ろを搔いていた。

「お前さん、腹あ減ってんだろう？」

「……なぜそれを？ もしかしておじさんも異能者？」

「さつきからグーグー鳴ってんじゃねえか」

その言葉を肯定するようにグツと短い音を鳴らすあたしの胃
袋。ここまで女の子らしさが無いのか、あたしは……。

「泊められないが、飯くらい食っていけ」

「ええーっ！」

「なんだあ？ 俺の飯が食べねえってのかあ？！」

「い、いえ。頂きます」

驚きのままロメリアを見ると、嬉しそうに笑っていた。

ああ、そうなんだ。納得してしまった。

確かにロメリアの言うとおり優しいおじさんなんだ。多少、素直じゃなくて口は悪いけど。

「へっ。ロメリアも手伝ってくれよ」

「はい！」

嬉しそうに返事をする、ロメリアはおじさんの後を着いてカウンターの向こう側へ回った。

この二人。なんだかんだで、上手くやってるみたいだなあ。

しばらくすると、おじさんが巨大な骨付き肉の乗った皿を持ってきた。芳しい香りと滴る肉汁があたしの食欲をこれでもかというくらいに刺激する。

コトンと皿が置かれた瞬間、あたしの中のスイッチが餓えた狼へと切り替わった。

「いただきますまああすっ！」

「まあて！」

肉にかぶりつこうとするあたしの頭を驚掴みにして抑えるおじさん。やっとなんか食事についてるのに待てるわけがない！

「ううう！　ワウツワウツ！」

「犬かお前は！　食う前に話があんだよ！」

「クウクウクウクウ……」

こんなにお腹空いてるのに、待てというのは残酷過ぎるんじゃないだろうか。

「……で、話ってなんですか？」

肉から目が離せないまま、半ば涙目になっておじさんに聞く。

「お前さん、異能者なんだろ？　類友にロメリアの目を治せるやつはいないか？」

「類友って……あつ！　おじさんも同じこと考えてたんだ！」

あたしの指摘で照れたようにおじさんの顔が少し赤くなる。

「お、俺は別につ！」

なんでこういう頑固親父は素直になれないかなあ。

ロメリアのこと考えてあげられるなんて、いいおじさんだと思ふのに。

「照れない照れない。残念だけど、今の所そういう異能者には

会ったことないんだ。でも、いる可能性は高いと思ってるよ」
あたしは以前、物を直せる異能者に会ったことがある。その人は頑なに「これは錬金術だ！」って言い張ったけど。

ああいうことができるのなら、人間の体も治せる異能者がいるって信じられる。異能者自体、こちらが考えもしない能力を持っていることが多いから。

「他にも心当たりがあるんだけど……これ、言ってもいいのかなあ？」

「なんだよ？」

「おじさん、インフィニットのこと好き？」

あたしは声を小さくしておじさんに問う。

「何の関係があるんだ？」

「いいから答えてよ」

この砂漠だけの世界において人類の救済を掲げる組織、インフィニット。

その裏で秩序を守るためという名目で異能者狩りを行い、罪の無い異能者を殺している。あたしの両親もそれで殺された。

おじさんがインフィニット側の人間なら、これから話すことは口にできない。

おじさんはじつとあたしを見つめると、ボソッと小さな声で呟いた。

「俺はかつてインフィニットと戦争をしたことがある。とある国の兵士だった」

「おじさんが?!」

宿屋の主人をやらせるには勿体無い体格をしていると思った。顔も厳ついし。

「悪夢を見ているようだった。殺したはずの敵がまた立ち上がるんだからな。あいつらがおかしいのか、俺がおかしくなっちゃまったのか。よく分からねえが、あのおぞましい光景は今でもまだ覚えている」

おじさんはグッと拳を握り締めながら語った。余程のことだったんだとあたしにも分かる。

「インフィニットの兵隊の中に異能者がいたんだね」

おじさんの言うように敵がおかしかったのか、おじさんがおかしくされたのかは判断できないけれど。その裏にはインフィ

ニットに属する異能者が関わっているはずだ。

「ヤツ等は狂ってやがる。人類救済を謳っておきながら交渉も無く逆らう国や街を滅ぼし、異能者狩りなんてしておきながら自分たちも異能者を抱えてやがる」

「インフイニットに敵対する元兵士の目線でない限り気づかないことだよ。でも、異能者を抱えるっていうのは初めて聞いたな」

インフイニットに対する疑問。インフイニットの敵国にいて戦ったからこそ、おじさんはそれに気づくことができたんだ。

「おかしいのはそれだけじゃないよ。さっきの心当たりがあるって言ったことにも関係あるかもしれないんだけど……」

「何がどうした？」

あたしは念のため辺りを見回し、誰もいないことを確認してから話し始めた。

「インフイニットを束ねる人物はね。何代にも渡ってその役目自分たちの子どもへと引き継いできたって話なんだけど……」

「有名な話じゃねえか」

「そうじゃないんだ。あたし、とあるおじいさんに会ったんだ。もう百歳を超える高齢のおじいさんなんだけどね」

ここで一旦言葉を切った。

まだおじさんに話しているか迷っている。

この話はまだ誰にもしたことがなかったんだ。なんだか話をするのが怖くなってしまった。

「続けるよ。ロメリアに関わることなら人事じゃねえ」

「あ。……うんっ！」

そうだった。おじさんはロメリアのことをちゃんと考えてくれている。こんなおじさんが敵になるわけないよね。

それに、あたしみたいな人間の言葉なんて信じる人も少ないだろう。あたしは話を続けることにした。

「そのおじいさんがね。その人物を見て先代、先々代とまったく変わらない容姿をしているって言うの。まるで同じ光景を見ているみたいだって。おかしいと思わない？」

先代、先々代を見てきたおじいさんが現インフイニットを束ねる人物を見た時、その仕草や振る舞いまでまったく同じだったと語っていた。

あたしはその話を聞いて、インフィニットを束ねる人物は代々受け継がれてきたのではなく、もともと一人の人間がしてきたんじゃないかと考えるようになった。

そう、異能者の力を使って若返っているんだ。さもその子どもであるという顔をしながら……。

「インフィニットの長は不老不死ってことか？」

「おじさんの話を聞いてからだと言憑性が少し出てくるね。たぶん、異能者が関わってるんだと思うよ」

「確かにな。こんな話、誰も信じやしねえ。だがそんな異能者が本当にいるとしたら……ロメリアの目を治せるかもしれないってことになるな」

「その異能者の力が人体に作用するものなら或いはね。不老不死なんてやってのけるのなら視力の回復もできるかもしれないんじゃないかと思うんだ」

ここまではあくまでも憶測。全部あたしの憶測なんだ。

それなのにおじさんたら、本当に嬉しそうな目であたしを見ている。本当にロメリアのことを思っているんだね。

「よしっ！ 望みが見えてきたぜ！」

「必死だね、おじさん。可能性はそんなに高くないのに」

「そうだな。だが必死にもなるさ。ロメリアのことだが……」

おじさんは頼んでもいないのにジュースをあたしの前に置くと、肘を付いて話を始めた。

あたしのような異能者に、それも今日会ったばかりの相手なのに、だ。よほどロメリアのことを考えているのだろう。

あたしもうんうんと二度頷いて耳を傾けた。

「うちには食用サボテンを材料にしたオリジナルのスパイスが二種類ある。それを同じ形の容器に入れてあるんだが……ロメリアのやつ、これをちゃんと区別してやがるんだ」

「そんなの蓋を開ければ匂いで分かっちゃうんじゃない？」

「最初はそうしていた。だが、今はもう匂いをかいじゃない」「どういうこと？ おじさんはどうやって判断してるの？ 同じ容器なんだよね？」

おじさんはカウンターの下から話しているのと同じものであろう石製の容器を二つ、カウンターの上に並べた。

その容器はまったく同じ形をしているものの、微妙に柄が異

なっていた。材料となる石の模様だろう。それがむしろ持ち味になっていた。匠の拘りを感じる。

「これはお高いものだね」

「まあな」

死んだ父さんが刀匠なんてものをしていたから、見る目にはちよつと自信があるんだ。

「ロメリアの目に柄は映らない。これくらい近づけば見えるんだろうが、そんな素振りは無かった」

「じゃあロメリアはどうやって判断してるの？」

木製の容器なら軽いから中身の量でも分かるのかもしれないけど、これは石製。これだけ重いとどれだけ入っているのか分からない。

「俺は気づいたんだ。ロメリアは触れただけで分かるんだってな。片方のスパイスはもう片方よりも使わねえから、容器に触れる頻度も変わってくる」

「まさか。それを触れただけで判別してるってこと？」

容器のすり減りやそこから生まれる手触りの違い。ロメリアはそれを手で感じ取っているのかもしれない。

「目が不自由な人間はその分、他の感覚が研ぎ澄まされるって聞いたことがある。つまり、そういうことなんだろ？」

足が不自由な人は杖を持つ腕の筋肉が発達するって聞いたことがある。

ロメリアは目が不自由だから、それに代わるものが発達しているのかもしれない。笛の音色が綺麗なのも、耳が人よりいいからなのかも。

「もしもだ。もし、ロメリアが望むのなら……一緒に連れて行ってやってくんねえか？」

おじさんは真剣な表情であたしを見ると、とうとうその言葉を口にしてしまった。

さつきから話を聞いているとそんなことを考えているんじゃないかと思っていた。

その目はどこか焦りのようなものも伺える。

「ロメリアに何かあったの？」

「今年のいつだったか、ある日を境にガクッと視力が落ちたんだ。前はもつと見えていた。間違いなくな。あの若さで光を失

うなんて考えられねえだろ？　なんとかしてやりたいが、俺にはどうすることもできやしねえ。俺はただの宿屋の親父でしかねえんだ」

だから異能者であるあたしを頼ったということか。旅をしているし、他の人よりも異能者と会っているし。

それよりも気になるのはロメリアの視力だ。徐々にではなくある日を境にというのが気にかかる。

その日、ロメリアに何かあったんじゃないだろうか。例えば異能者との接触とか……。これはおじさんには言えないや。今となっては過ぎたことだし、憶測でしかない。

「でもいいの？　余所者で異能者で、会ったばかりのあたしで」
「ロメリアはお前さんに懐いているからな。それに、俺は俺で人を見る目には自信があるんですよ」

「おじさん……」
頭の後ろを搔きながらあたしから視線を外すおじさん。

今ならロメリアが慕う気持ちもよく分かるなあ。

「おじさんはただの宿屋の親父でしかないって言うけどさ」

「なんだよ？」

「ロメリアはそんなおじさんが好きだと思っうよ？」

「なっ！　かか、からかうなっ！　！」

ドンッ！　とカウンターを殴りつけるおじさん。

怖い顔してるけど耳まで真赤ですよ？

でも、あたしが言ったことは嘘じゃないと思うなあ。それはロメリアを見ていたら分かることだから。

「お姉ちゃん、お待ちせう！　……あれ？　ブレンおじさんここに居たのお？」

ロメリアは両手と頭の上にお盆を乗せて大量の料理を運んできてくれた。それは慣れたものなのかな？

見ていられなくなったあたしはすかさず頭の上のお盆を手にとった。

「うん。お姉ちゃんと恋のお話してたんだ」

「してねえだろっ！」

おじさんはまたもやカウンターを殴りつけ、さっさと奥へ行ってしまった。うーん。これでよかったのだろうか。

「あつ、ルルは何を食べるのかなあ？」

「アルフアルフアは何でも食べるよ。たぶん」

「ルルウー」

バッグのボタンを外すとルルが勢いよく飛び出してきた。

カウンターのの上に乗るとロメリアの料理をこれでもかとかと口を開けてかぶりつくルル。体の体積に似合わない食いつぶりだ。

「ちよつとルル！ それあたしも食べたかったのにい！」

「ルルン、ルーツ！」

今度はあたしが持っていた皿に飛びついてきた。

ルルめ、ロメリアの料理を独り占めするつもりだなあ！

あたしもルルに負けじと並べられた料理にがつついた。

空腹と食欲が相まって女の子らしさという言葉はもうどこかへ飛んでいってしまった。



「あー。食べた食べたあー」

「ルルウー！」

あたしとルルはあれからずっと食べ続けていた。

あまりの美味しさに手が止まらず、デザートまで頼んでしま
う始末。

ルルなんて食べ過ぎて体型が維持できていないくらい丸々と
して転がっている。

「ふいー。おそまつさま」

ロメリアも疲れたらしい。あたしの隣の席につくとカウンタ
ーに身を預けてぐったりとしていた。

「お姉ちゃん。よく食べるねえー」

「食べられる時に食べなくちゃ。旅なんてできないからね」

「ルツ！」

「いや、ルルは食べ過ぎだよ」

こつんとルルを指で弾くと、その丸まったお腹でゴロゴロ
とカウンターのの上を転がっていく。

これがあのアルフアルフアの子どものかと疑問に思っ
てしまふくらいの変貌ぶりだ。

「さて。お腹もいっぱいになったし、どこか宿を探さないとね」

おじさんの気持ちを考えてたらここには泊まれない。でも悲観はしていない。満腹で気分が良かったし。

「ごめんね、お姉ちゃん」

「いいのいいの。ロメリアが気にすることじゃないよ」

ロメリアの頭を撫でてあげようと手を伸ばす。

「――、なんだ？！」

その時、窓の向こうから強い視線を感じた。

さっきの野盗かとも考えたけれど段違いの敵意だ。それも体に寒気を覚えるほどに。

「お姉ちゃん？」

このままここに居て、店の中に入られたらロメリアとおじさんの迷惑になる。

あたしはロメリアの頭を撫でると、その手にルルを預けた。

「なんでもないよ。すぐ戻るからここで待ってて」

「ふえ？」

「ルルルル？」

水御華を手に取り、宿屋の外へ飛び出した。

そこには長身の男が立っていた。

腰には二本の細い剣。敵として見ているはずのあたしが飛び出してきたというのに微動だにしなかった。

その視線がゆっくりとあたしに向けられる。

目が合うと宿屋の中にいた時よりも寒気を感じた。

凍るような男の睨みに緊張と焦りが募っていく。

あたしの本能が悟っているのだろうか。その男の強さを。自身への危機感を。

ただ睨まれているだけなのに、寒気で体の震えが止まらない。

「だ、誰なの？ あたしに何の用？」

振り絞るように叫ぶあたしに、男は睨んだまま両手を二本の剣に添えた。

「シノ||カズヒ、だな……？」

「えっ?!」

――この男、あたしを知っているの？

ただの異能者狩りなら名前なんて知るはずない。

それはつまり異能者ではなく、あたし本人を狙っているということだ。そんな敵は初めてだ。

男はあたしの顔色の変化を見て確信したのか、返事を待たずに二本の剣を抜いて構えた。

剣は二本とも片刃で同じ形状をしている。反りも波紋も無いけれど、どこか刀のような印象を与える。

「ベゼルⅡマージェスタ―」

素っ気無く名を名乗ると同時に、あたしに向かって剣を突き出してきた。

間合いを詰めてから剣を突き出すまでが物凄く速い！

しゃがんでベゼルという男の剣を避けると、もう一本の剣があたしの眼前に伸びていた。

ガチンッ！

「――貴様を殺す者だ」

「あたしを、――殺す？」

なんて動きだ。刀を抜く暇が無いじゃないか！

鞘でその一撃を受け止めるのが精一杯だった。

「何であたしを殺すのさ？！」

あたしの問いを無視して剣を振り下ろしてくるベゼル。

鞘でもう一本の剣を受け止めたまま刀を抜き、頭上に下ろされるもう片方の剣を受け止めた。

刀と鞘で二本の剣を受け止める格好となる。

「…無駄だ」

グツと両方の剣に力を込めるベゼル。

圧倒的な腕力の差に押し潰されそうになる。

このままじゃ押し斬られてしまう！

「こうなったら！ 水御華！」

刀の名を叫ぶと重なり合うあたしの刀とベゼルの剣の接点から水が噴き出した。

その水圧であたしたちの剣が弾き合う。

ベゼルは大きく後ろへ跳ぶと体勢を整え、その間にあたしは水御華を構え直した。

二本の剣に対応するため、鞘は左手で握ったままだ。一本の刀である速い二本の剣を捌き切れる自信が無い。

その一太刀は片腕で振るって感じさせないくらい重

く、またこの上なく速いのだ。細身の剣の性能を完全に引き出して
している。

これまで出会った人間の中でも群を抜いて強いだろう。

——ちよつと、ヤバイかも……。

「その刀……噂通り水を操るのか」

さっきまで黙りこくっていたベゼルが水御華を見つめて口を開いた。

「噂通りって？」

いったいどこまであたしの情報が知られているんだろう。

今度は鞘の方へ視線を移してきた。

「その鞘はなぜ斬れん？」

まるであたしよりも刀の方へ執着しているみたいだ。

あたしの命なんて簡単に殺れると思っ
ているからか。

それよりも気になったのはこの水御華を一目見ただけで刀だと分かったことだ。

刀という形状と名称。ここいらでそれを知る者はほとんどいないはず。

「なんで刀だつて分かるのさ？」

「……」

水御華は遥か東の地に伝わる技法で作られた剣（つるぎ）。

独特な刀身の反りと波紋がその特徴を示している。

ここいらでこの刀という名称を知っている人間は刀の製法を知る父さんとその娘のあたしくらいのものなのに。

「あんた、父さんの知り合いなの？」

「水を生み出し操る刀——実に興味深い」

ベゼルはあたしの質問に答えることはなく、熱を帯びたようにギラついた目で水御華を見ていた。

そして小さく、微かな声で言った。「欲しい」と……。

「父さんが残してくれたこの刀。絶対に渡すもんか！」

「……その腕が無ければ振るえまい」

それからベゼルがあたしを見ることは無かった。

その目に映るのは刀である水御華、ただ一つだけ。

「——うくっ！」

次の瞬間。ベゼルの双剣があたしの右腕に伸びる。

まるでハサミで裁断するかのよう
に、二本の剣が絡みついて

きた。

「くううっ！」

その動きに反応を鈍らせたあたしは腕を引いて避けるよりもむしろ刀の柄で交じり合う二本の剣を受け止めることにした。ベゼルの双剣が水御華の柄に食い込み、あたしの右腕へ微かに二つの傷を付けた。

言葉にしたように本気であたしの腕を狙ってきている。

頭や首、体や心臓ではなく、右腕の両断にのみ集中して。

それほどまでに水御華を欲し、あたしという人間を軽んじているということか。そんなことさせるもんか！

「くっ！ ま、け、る、もんかあっ！」

鞘を捨てて水御華を両手で握る。狙いが腕一本なら水御華一本で戦った方がいいと判断したからだ。

両手で握る水御華でベゼルの双剣を押し返す。柄の部分は刀身よりも力押しが利きやすい。

いかに大人の男であるベゼルでも、その双剣で押し返すことができないようだ。

「てえいっ！」

ベゼルの双剣を一気に押し返し、そのまま水御華を振り下ろす。が、既にベゼルはいない。一足で刀が届かない所まで跳んでしまった。

ベゼルが地面に着地したと同時に、あたしは水御華を鞘の沙華月へ納めた。

「これならどうだ！」

駆け出すベゼルに合わせて抜刀する。

抜刀による鞘走りであたしの一太刀は最速の剣閃を生んだ。

「甘い」

ベゼルは容易く踏み止まり、あたしの一太刀は空を薙いだ。

抜刀した段階で抜刀術を読んでいたらしい。

——けど、手の内は完全に読まれたわけじゃない！

最速の一太刀から生まれる水は鋭さを増す。

「奥義・水刃の太刀！」

その切っ先から放たれるのは鋭く細い水の刃（ウォーターカッター）。

圧縮して放たれる水はそれだけで凶器となり得る。

鋭い水の刃はベゼルに向かって一直線に伸びる。

「フンッ！」

ベゼルはあろうことか二本の剣を振るい、一直線に伸びる水の刃に向かって振り下ろした。

「うおおおおおっ！」

バシユッ！

激しい音と共に×の字に斬り裂かれる水の刃。

わずかに残った水の刃がベゼルの両肩を濡らした。

「そんなっ！」

「我が剣は水をも断つ。否——」

間合いを一気に詰めるベゼル。

「立ち塞がる者は全て断つ！」

あたしはとっさに水御華を振り下ろした。

ベゼルは右の剣でそれを受け止めると、あたしの腕を目掛けて左の剣を薙いだ。

——しまった！ 狙いは未だあたしの腕か！

ギンッ！

「あうっ！」

水御華が大きく宙を舞った。

そして自らの重さに身を委ねて落下を始める。

「痛ううっ！」

右腕から滴り落ちる血。

剣を受けた衝撃から痺れを引き起こしている。

「浅かったか……」

あたしはとっさに手を放して難を逃れていた。

水御華は空へと打ち上げられ、あたしの右腕はわずかに剣をかすめたのみ。

あたしの腕はちゃんと付いている。そうだというのに、右腕から先の感覚が無くなっていった。

ベゼルがつけた斬り傷から異様な冷たさを感じる。

その冷たさから、あたしはさも腕を跳ね飛ばされたような錯

覚に陥っていた。

ベゼルは素早く二本の剣を納めると、落ちてきた水御華を掴んだ。

そして一振りしたのち、その切っ先をあたしへと向ける。ここでベゼルは初めてあたしと目を合わせた。

「この刀の持つ力、見せてもらった。名を、なんと言う？」

「…その子の、名前、は…水御華、だよ」

ベゼルに言葉を返すあたし。――嫌だ。声が震えている。

「その子、だと…？」

「なんだって、いいでしょ」

あたしは水御華をただの刀と思っていないだけ。

そんなことをベゼルに言っただけで分るはずがない。

その大事な水御華を、奪われてしまったんだ。それが悔しくてたまらないのに。今は怖くて動けない。

「確かに、どうでもいい。そうか、水御華か…」

水御華を舐め回すようにじつくりと眺めるベゼル。

それから水御華を横へ一薙ぎ、縦に一振り。腕に力を込めてもう一振り空を斬り裂いた。

初めて手にする刀とは思えないほど華麗な太刀筋だった。

しかし、ベゼルは動きを止めると再び水御華を眺めた。

「どうということだ…？」

ひとしきり水御華を眺め、視線はまたあたしの方へ。

とことんあたしより刀の方に興味があるらしい。ひよつとして水を出そうとしているのだろうか？

「貴様、異能者か。だから、水が…」

「そうだよ。異能の力が無ければ水は出ない。でも、水なんか出なかったって、いい刀には代わりないでしょ！」

父さんが生涯をかけて作った刀なんだ。

あたしから見ても、水御華という刀があらゆる刀剣の中でもひととき美しく感じる。

「…確かに、な…」

あたしの言葉に、ベゼルは以外にも素直に頷いていた。

刀剣マニアの疑いがあるベゼルをも唸らせるほどの刀だということだ。

それより、どうやって取り返すか…。

あたしは横に落ちている水御華の鞘、沙華月に目をやった。武器らしい武器はあの鞘くらいか。

ベゼルの言ったように剣を受けるだけの強度があるだなんて今まで知らなかった。

右手の感覚は失ったまま。こんな状態で戦えるのか……？

「貴様には、もはや用は無い……」

「ええっ？！ ちよ、ちよっつつ！」

こつちが必死に勝機を探してゐるって時に！

「己の血で己の剣を濡らすがいい」

ベゼルは水御華を振り上げると、興味のないものを見るようにあたしを見下ろした。

水御華によつて両断される光景が目には浮かぶ。

——このままじゃやられてしまう。なんとかしなくちゃ！

なんとかか！ あたしはまだ死にたくない！

「死ね……」

ベゼルの手にある水御華が容赦なくあたしの体に振り下ろされる。

——もう、ダメだ！

あたしは自らの死を覚悟した。その時——。

キイイイイイインツ！

「シノよ。諦めるなっ！」

「あ、……ああっ！」

いつの間にか目の前に女の人が立っていた。

とてつもなく大きな剣でベゼルの一撃を受け止めている。

その登場に、その懐かしさに、あたしの胸が高鳴った。

「まったく。名乗るヒマも無いではないか」

「ご、ごめんなさい！」

「まあ、おぬしも無事であったし、この登場にはいささか満足しておるし。良しとするかのう」

歳はあたしよりも少し上くらい。女のあたしでも見惚れてしまふような美しい顔立ち。足元まで伸びる青みのかかった黒のポニーテール。キモノと呼ばれる異国の服にスカートという不思議な格好。そして自身と同じくらいある巨大な剣。

——あたしは……この人を知っている！

「イナさんっ！」

「うむ！」

その名を呼ぶとイナさんは親しい者にしか向けない無邪気な顔で微笑んでくれた。

あたしもこんな状況だというのにつられて笑ってしまった。

「相変わらずゴタゴタに首を突っ込むのが好きじゃのう」

「イナさんも相変わらず変わった喋り方しますね」

「ふむ。そうかのう？」

その巨大な剣でベゼルの一撃を受け止めたまま、片方の手でぼりぼりと頬をかくイナさん。馬鹿力も相変わらずだ。

イナさんはあたしにとって友であり師匠でもあり数少ない理解者の一人でもある。

一年ほど前、共に旅をしたこともある。頼りになる人だ。

「伏兵、か……？」

ベゼルは宿屋の二階を見てそう呟いた。

あたしからは死角になっていたけど、イナさんはあの窓から飛んで駆けつけてくれたんだ。

高いところが好きなのも相変わらず。しかしその巨大な剣を背負いながらここまで駆けつける身体能力の高さはずば抜けている。

なによりもあたしのためにそうしてくれたことが嬉しい。

異能者であるあたしの味方になってくれる人なんて、この世界では本当に少ないから……。

「おじさんの宿屋に泊まっていた美人ってイナさんのことだったんですね」

「うむ。他に客はいないようじゃったし、そのようじゃな。なかなかサービスの良い宿じやぞ。飯も美味しいのう」

「うん。それには同感だね」

でもあたしは泊まれないんだよなあ。イナさんと一緒でもやつぱり断られるかな？

「おっと！」

ベゼルに押され、両手で大剣を持ち直すイナさん。

「感動の再会に水を差すとは空気の読めぬ者じゃな」

「……」

「まあよい。それよりその不慣れな剣で私に勝てると思うてるのなら、そのまま倒させてもらうぞ？」

イナさんはそう言うのと、あっさりベゼルの体を剣で押し飛ばしてしまった。

いや、今のはベゼルの方から飛んで避けたようにも見える。

ベゼルは水御華を地面に突き刺すと腰の双剣を手にした。

執着していた水御華をあっさり手放すとは予想外だ。

イナさんを自分の獲物でないと倒せない相手だと見抜いたのだろうか。

それでも、イナさんが倒される所なんて、ぜんぜん想像できないや。

「おぬしは相手の力量をしっかりと測ることができるようじゃない。双剣使いが一本の剣で私に勝てるはずもない」

「……」

「だんまりが好きなのヤツじゃのう」

ぐるんつと巨大な剣を振り回し、構え直すイナさん。

イナさんが構えを取るのも珍しいことだ。それだけの相手なんだベゼルは……。

「貴様は誰だ。なぜ邪魔をする」

イナさんの目がキュピーンと光る。

あ。あれをやるつもりだな。

「フツ、悪党に名乗る名は無い！ ……と言いたいところじゃが、今回は特別に教えてやろう」

——イナさん。本当は名乗ってたかったんだろなあ。あたしに加勢してくれたからそのタイミングが無かったし。

イナさんは名乗りを上げるのが趣味みたいな名乗り好きだ。相変わらず変わった人だ。

「黙して聞けい！」

「……」

「さつきから黙ってますけどね」

あたしの言葉を見殺しして、イナさんは巨大な剣を高らかに掲げる。

太陽の光でその剣を照らし、煌びやかな光を纏った。

「我が名はイナ！」

そのままぐるんと剣を一回転させる。

「イナッシルバチオッボルダーン！」

剣を更にもう一回転させ、ベゼルを見据えた。

「すべての悪を断つ、正義の剣（つるぎ）……」

それに対し、ベゼルは当然無反応だ。相変わらず興味のない目つきで見据えているだけ。

「この鬼神斬巖刀の煌きを恐れぬならかかってこおい！」

イナさんは首を振ってその長い髪を風にたなびかせた。

ここまで全部計算通りなんだろう。なんとも絵になる光景だった。

鬼神斬巖刀。そう、イナさんの持つ巨大な剣の名前。名前のように、鬼神の如く何でも斬り裂いてしまうイナさんに相応しい大剣だ。

「……フッ。キマった」

目を輝かせて喜びを露にするイナさん。自分の名乗りに心酔してるのがよく分かる。

敵を前にしてこの余裕。ホントにさすがだ。

対するベゼルは変わらず興味のない目つきで見据えているのみだった。

「……邪魔をするなら殺してやる」

イナさんの名乗りに何の感慨も持たない様子。

それがイナさんには面白くないのは当然。ムッと少し頬を膨らませている。

「なら、こちらもバツサリいかせてもらおうかのう！」

鬼神斬巖刀を振りかざし、ベゼルのもとへ駆け込むイナさん。

ベゼルの右の剣がイナさんの顔面へ突き出される。

が、既にイナさんの姿はそこには無い。あたしの体に冷やりとした緊張が走った。

「そこかつ！」

突き出した右の剣。その右横の死角に向かって無反応に左の剣を払うベゼル。

キインという刃と刃の交わる音はするものの、そこにイナさんの姿は無い。

「遅いつ！ 私はここじゃ！ ここにおる！」

ベゼルの右後方、その上空にイナさんの姿があった。

最初の一撃目を避け、二撃目を弾いてからそこに現われるま

で、ほんの一瞬のことだった。

「チエストオオオオ！」

イナさんの鬼神斬巖刀が唸りを上げてベゼルの右肩へ振り下ろされる。

その太刀筋は巨大な剣に似つかわしくない程の速さだ。

キイイイイインツ！

二本の剣を持ってイナさんの一撃を受け止めざるべゼル。

まただ。なぜあの二本の剣にあれだけの強度があるのだろうか。見た目は水御華と変わりないので……。

しかし、そこはあたしとイナさんの実力の差なのか。ベゼルはその重みから膝を地に着けて堪えていた。

「断てぬ物無しの一太刀、よくも受け止めおったなあ！」

「……なら、我が剣を持って、その命を絶ってやろう」

「それは無理じゃな。ヒーローというものは無敵なのじゃ」

「下らんことを……」

イナさんもベゼルも、血走った眼で互いを見つめていた。

強い相手を見つけた喜び。というものなんだろうか。そのギリギリした視線から垣間見えるようだ。

拮抗する二人を前に、あたしはただ見つめるほか無かった。なんて人たちなんだろう。次の瞬間には自らの首が飛ぶかもしれないというのに。

己の剣に対し、絶対の自信を置いているんだ。

それに比べてあたしはどうだ。水御華を持ってあの中に入る事ができるだろうか。

それはきつと適わない。あの領域に踏み入ることはこの先もきつと……。

「むっ、何じゃ？！」

イナさんの声に続いて、ヒュンツという音を聞いた。

その次の瞬間、街のいたるところから爆発音が鳴り響いた。煙と粉塵を撒き散らし、そこら中に火の手が上がる。

幸いにもロメリアのいる宿屋は無事だ。

「おぬしにも仲間がいたのか？！」

ベゼルを見るとその表情は険しかった。

どうやらこれはベゼルも予期しないことだったらしい。
街中でこんなことをするとしたらさっきの野盜しか考えられない。

「ゲヒヒッ。見つけたぜえ！」

案の定。さっきの野盜のおじさんがあたしたちの前に姿を現した。ぞろぞろと仲間まで引き連れて。

「チッ」

隙を見てイナさんから離れるベゼル。

イナさんもベゼルの追わず、地面に突き立てられた水御華のそばへ立った。

さっきあたしが相手をした野盜のおじさん。

そのおじさんを筆頭にベゼルに群がる野盜たち。

こうして見るとベゼルが野盜のボスに見えるけど、どうもそういう雰囲気ではない。

ベゼルは野盜のおじさんを一瞥した後、目を伏せた。

「これは、どういうことだ……？」

「へえ。あの女も仲間が居たみたいだったんで助太刀に来やした。これだけの人数なら造作もねえ」

「………」

あたしの仲間というといナさんのことか。

するとベゼルの雇ったのは野盜ということになるのかな？

とても野盜の言うことを聞くようには見えないけど。

「シノカズヒの居場所さえ分かればお前たちに用は無い」
そうだ。野盜のおじさんはあたしの名前を知らないはず。

なのにベゼルはあたしを標的としてここに来た。

それはつまり、ベゼルは最初からあたしを狙っていて、居合わせた野盜のおじさんから情報を得たということになる。

あたしが狙われる理由なんてますます分からないぞ。

「……退け。助太刀など無用」

「へい。でもこれだけの人数がいれば楽勝——」

ズンッ——

「ゲヒッ?!」

ベゼルの双剣が野盜のおじさんの喉と心臓を貫いた。何の躊

躊いもなく。味方であったはずの二人が……。

「んなあ?!」

「お、お、親分!」

その光景に他の野盗たちも驚きが隠せない。

ベゼルが剣を引き抜くと、野盗のおじさんはそのまま後に倒れて動かなくなった。

完全な即死だ。有無を言わせる暇も与えない。

ベゼルの表情はさつきと変わらなない。返り血を気にする素振りも無く、どこともつかない方を見ている。

「興が削がれた。シノ||カズヒ、次は殺す……」

「シノを殺させはせぬ。この私がいる限りはのう!」

「……フンッ!」

鬼神斬巖刀をベゼル向けるイナさん。

しかしベゼルはそれ以上何も言うことは無い。

あつけにとられる野盗たちの間をすり抜け、立ちこめる煙の中へ姿を眩ましてしまった。

ベゼル||マーjestタ。その強さは本物だった。

この場にイナさんが居なかったらどうなっていたか。容易に想像できてしまう。

「シノよ、恐怖にのまれるな。再戦は遠くないのかもしれぬぞ」

「は、はい!」

それでも恐怖で体が震えていた。

このままじゃダメだと知りつつも、あたしにとってベゼル||マーjestタの存在はそれだけ大きなものになっていた。

異能者だからとあたしの命を狙う者は何人も居た。

けれど、ベゼルはあたしの名前を知っていた。異能者としてではなく、シノ||カズヒという人間の命を狙っているんだ。

その理由は分からないまま……。

「気を引き締めよ。誰か来るぞ」

そう言って水御華を地面から引き抜くイナさん。

たしかにこちらに駆けてくる足音がする。

「お、親分っ?!」

呆然とおじさんの死体を見る野盗たちのところに、もう一人の野盗が駆けつけてきた。

見た目が殺された野盗のおじさんかなり似ている。兄弟か

何かかな？

「こつちだ野郎ども！ 親分がやられた！」

その声に街中にはびこつていた野盗たちがぞろぞろとあたしたちの前に姿を現した。

ぐるつとあたしたちを囲う形をとられる。

数はおよそ百人ほどだろうか。これで全部かは分からないけど。死んだ野盗のおじさんが言った通りになってしまった。

「テメェら何呆けてんだあ！ あ、兄貴が！ 俺たちの親分が殺されたんだぞっ！」

死んだ野盗のおじさんを兄と呼ぶこの男の声は確かによく似ている。本当に血を分けた兄弟なのかもしれない。

「あ……すいやせん」

「一瞬のことだったもんで……」

男の声にそこにいた野盗たちが我に返る。

どうやらこの男も野盗の中では上の立場らしい。それでも野盗には違いないけど。

「絶対に、絶対に許さねえぞ！」

「ちよつと待ってよ。おじさんを殺したのはベゼルだよ！」

この男はベゼルがおじさんを殺したところを見ていない。だからそばにいるあたしたちを仇だと思っているんだ。

「関係ねえ！ 元はと言えばお前が元凶だろうが！」
ズキンツと胸が痛んだ。野盗にまでそう言われるなんて思い

もしなかつたから。

「それはそう、だけど……」

家が破壊され、街に火の手が上がっているこの状況も、元はと言えばあたしがここに来たのが原因なんだ。

あたしが野盗のおじさんに目を付けられなければ、ベゼルに殺されることもなかつたし、街は無事だったのかもしれない。

「ふむ。確かに関係ないのう」

「イナさん？」

鬼神斬巖刀を片手に、堂々と前へ踏み出すイナさん。

「そう、おぬしらが街に火を放った悪党であることに変わりはない。数の暴力とはよく言ったものじゃ」

「なんだとう？」

「自分たちの悪行を棚に上げて物を言うなっ！ 私の友を侮辱

する者は、誰であろうと許さぬぞ！」

イナさんはこれでもかというほどに大きな声を上げ、野盗たちを睨み付けた。

その眼光の鋭さに、野盗たちもたじたじた。

「悪党めが。ただで済むと思うでないぞ！」

「うっ！」

イナさんの言葉に圧倒される野盗たち。

味方であるあたしですら圧倒されてしまいそうだ。女だてらにこの迫力。さすがはイナさんだ。

それにあたしを庇ってくれたことも嬉しいんだ。

「シノ。おぬしもしっかりせい！」

「は、はいっ！」

イナさんはゆっくりとした足取りであたしの所にやってくる。と、水御華を手渡してくれた。

ベゼルによってあたしの手から離れた水御華を、イナさんが取り返してくれたんだ。

「おぬしの愛刀。もう離すでないぞ？」

「あ、ありがとう。イナさん……」

「うむっ。それで自分の身を守るのじゃ。水御華が力を貸してくれるはずじゃ」

そう言ってあたしの前に立ち、野盗の群れに剣を向けるイナさん。

百人近い野盗たちを相手に、一人で立ち向かおうとしているのが分かる。

そんなの無謀だって誰が見ても分かるのに。

「俺たちを敵にするのか？ 誰かやられたら残りのやつらがどこまでもお前を追いかける。お前の家族も、仲間も、すべて皆殺しにしてやるぞ！」

「それで脅しているつもりか？ 片腹痛いわ」

「脅しじゃねえ！ 俺たちは本気だ！」

「ならばそのすべてを斬り伏せるのみ！ 私の身内に手をかける者は容赦なくバツサリいかせてもらうぞ！」

そう言い放つイナさんに、野盗の何人かはその迫力の前に後ずさりしていた。

それがイナさんの強さ。どんな相手だろうとも、何人いよう

とも、戦うことを止めない。

自分の正義のために剣を振るい続け、たくさんの人を守ることでできる強さを持っている。

それに比べてあたしはどうだ。何を守れる？ 何ができる？ それすらも分からないまま水御華を振るっている。

きつとイナさんのように戦うことなんてできない。

「野郎ども！ やつちまえ！」

『おおおおお！』

男の合図に、無数の野盗たちが一斉に剣を振りかざしてイナさんへ駆け出した。

それに対し、イナさんは剣を振りかざして咆える。

「我が名はイナ！ イナ！！シルバチオ！！ボルダーン！ 我こそは悪を断つ正義の剣（つるぎ）なり！」

イナさんは本気だ。本気でこの数を相手に戦おうとしている。百人近いこの数を相手に戦うなんて無謀すぎる。

——それなのに、それなのにあたしはっ！！

『うわあっ！』

野盗の何人が水しぶきによって吹き飛んだ。

あたしはいつの間にかイナさんの前に立ち、水御華を振るっていた。

「ハア、ハア……」

考える前に体が動いていた。

こんな人数を相手にするなんて、自分でもびっくりしている。——でも、これで良かったんだ。

イナさん一人を戦わせるよりはずっといいから……。

「シノ。おぬし……よいのか？」

「いいんです！ どんな相手だろうとも、何人いようとも、あたしは戦う！ イナさんと戦う！」

父さんと母さんを殺されたその日からそう決めたんだ。

この水御華と共に戦い続ける。それがあたしの選んだ道だ。そしてイナさんを、大切な人を失いたくない！

「イナさん！ 余計なことかもしれないけど……」

今になって呼吸が荒くなっていることに気づいた。だいぶ緊張しているらしい。能天気なあたしらしくもない。

でも、この気持ちの昂ぶりは抑えられそうにないんだ！

「フツ。みなまで言うな。おぬしが戦うこと、その信念を止めることなど誰にもできはせぬ。私の背中、預けたぞ？」

「はいっ！」

あたしとイナさんは背中を合わせると、頭上で剣を交わした。

キイイインッ！

それを戦いの合図として、あたしたちは野盗の群れに向かって駆け出した。

「あたしはシノカズヒ！ 砂漠のアメフラシだ！」

「たかが女二人だ！ 何もできやしねえ！」

「そのたかが女二人でも、あたしたちは戦う！」

剣を振り上げる野盗に対し、あたしはその剣が振り下ろされる前に間合いを詰めた。

すれ違いざま背中に一撃を浴びせ、そしてそのまま次の野盗の所へ向かう。

剣の振り方を忘れたのではないかと思うほどに、ほとんどの野盗が攻撃する間も無く地に伏していった。

「な、なんだこいつ？ ただの女じゃねえぞ！」

「こっちの女もやべえ！ まるで見えねえ！」

あたしの動きにたじろぐ野盗たち。

イナさんの方を見ると、周りの野盗たちのほとんどを薙ぎ倒していた。

——やっぱり、まだまだイナさんにはほど遠いや。

その勇姿に感化されたあたしは更に速く水御華を振るい、野盗たちを捻じ伏せる。

騒ぎに駆けつけたのか、街の中から野盗の仲間がぞろぞろと顔を並べて出てきた。

それでも不思議と心の中は穏やかだった。

振り返るといつもそこにイナさんの背中があったから。

「水よ！ 荒れ狂う龍と成りて敵を飲み込め！」

水御華を構え、その切っ先から膨大な水を放つ。

まさに暴れる龍の如く野盗たちを一気に蹴散らしていった。

「咆えろ斬巖刀！ 鬼神の如く！」

イナさんは身の丈ほどの巨大な剣、鬼神斬巖刀を振り回し、

瞬く間に野盗たちを斬り伏せていった。

あれだけの超重量武器を振り回しているというのに、まったく隙がない。

それでいて、見惚れてしまうくらい戦う姿は美しかった。

——おっと！ 見惚れている場合じゃない。あたしも負けていられないぞ。

あたしたちは次々に野盗たちを打ち倒していった。

気が付くと百人近くいたはずの野盗もほんの数分で半分も立っていないかった。

中には戦う前に逃げ出す輩もいたけれど、それでもイナさんが倒した数の方が圧倒的に多い。

残った野盗たちから戦いそのものに躊躇が見えている。

数が多い方が有利だとか、相手が女だからだとか、そんな余裕を持っていたのがそもそも間違いないんだ。

ここであたしとイナさんの背中が合わさり、激しく動き回っていたあたしたちの足がやとと止まった。

「シノ。強くなったのう」

「いいえ。まだまだ足りません！」

イナさんのように強くなりたい。その想いだけがあたしをこれだけ動かしている。

それは今も変わらない。水御華もそうであるかのように、あたしと共に戦ってくれている。

「うむ！ その心意気や良し。では続きと行くかのう？」

「はいっ！」

あたしとイナさんは舞い踊るように再び戦場を駆け抜けた。幾度と無く剣を振るい、水を走らせ、野盗の数はとうとう十

人を割った。

そんな中、野盗たちの何人かが宿屋の中へ入っていくのを目撃した。

「しまったっ！ イナさん！」

「人質を取るつもりか！」

目の前の野盗を押し退け、あたしとイナさんは急いで宿屋の方へ向かった。

宿屋の中にはロメリアがいる。それにおじさんや他のお客さんもいるかもしれない。

そんな人たちを傷つけさせるわけにはいかない！
あたしは祈るような想いで宿屋へ向かった。
その時———。

『うぎよええええっ！』

宿屋の扉を破壊しながら野盗が二人、盛大にふっ飛んできた。
「な、なんじゃ？！」

その異様な光景に足を止めるあたしとイナさん。飛んできた
野盗の顔は見るも無残に腫れ上がっていた。

そしてまた宿屋の中から野盗が飛んできて、横たわる野盗の
上に折り重なった。

「この双拳（ダブル・パンチャー）のブレンを舐めんなあ！」
宿屋のおじさんの声が響く。

それから数秒後、おじさんは両肩に二人の野盗を抱えて出て
きた。

地面で積み重なった野盗の上に、おじさんは更に二人の野盗
を放り投げた。

まるでゴミを捨てるかのように。

ここまで。野盗たちが宿屋に押し入ってから数秒のできごと
だった。

「ここはブレン殿に任せよう」

「へっ。チンピラ如き屁でもねえぜ！」

「おじさん。ロメリアは大丈夫？」

「おうよっ！ちゃんと厨房の方に隠れてるぜ」

おじさんがクイツと親指で宿屋の奥を指すと同時に、宿屋の
裏の方から乱暴に扉を開ける音が響いた。

その足音はあたしたちの方へ向かってくる。

「ハアッ、ハッ：：そこを動くなあ！」

野盗の男が息を切らして出てきた。

それは野盗の親分だったおじさんを兄と呼んだあの男だった。
その太い腕にはロメリアが抱えられている。男は腰からシヨ

ードソードを抜くとロメリアの首にあてがった。

「おじさん！大丈夫じゃないよ！」

「チクシヨウ！こんなはずじゃあ！」

悔しさと怒りに足で地面を叩くおじさん。

ロメリアのことを一番心配しているのはおじさんなんだ。その気持ちはよく分かる。

「一步でも動いてみる。このガキが——って、女あ！ 動くなって言ってるのが聞こえないのかあつ！」

野盗の男があたしの後を見ながら声を荒げた。

振り返るとイナさんが残りの野盗をバツサリやっているところだった。

これでもう野盗はこの男だけになってしまった。

「む？ 動くなと言われる前じゃ。問題無かろう？」

イナさんはそう言っただけの横に立つと、あたしに向かってイタズラっ子のような笑みを浮かべてぺろっと舌を出した。

「この野郎！ う、動くな！ もう動くな！ 少しでも動いたら分かってるんだろうなっ？！」

男はロメリアを盾にするように自分の前に持ってきた。

さすがのロメリアも自分がどういう状況にいるのか分かっていないらしく、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「ひっぐツ……シノお姉えちやあん！」

「泣くな！ 泣くと殺す！」

「うう……ひっぐツ！」

ロメリアは声を殺して涙を流していた。

あんなに笑顔の似合うロメリアを泣かせるなんて！ すぐにでも駆けつけてやりたい。けど、それだとロメリアを危険に晒すことになる。

「ロメリア！」

「くっそお！ あの野郎、ただじゃおかねえ！」

ロメリアの身を案じるあたしとおじさん。

歯がゆさと焦りが募っていく。

ただ、イナさんだけは静かに野盗を見ていた。

「殺したら人質にはならぬぞ？」

「う、うるせえ！」

じわりとすり足で歩みを進ませるイナさん。

そうか。イナさんは男の隙を捜しているんだ。それが今でき

る最善のことだから。

「お前えら動くんじゃねえぞ！」

じりじりと後退りする野盗の男。

あたしたちとの距離をだんだんと離していく。

このままじゃ助け出すこともできなくなってしまう。

「イナさん……」

あたしは野盗に聞こえない小さな声でイナさんに話しかけた。

イナさんもそれを察しているのだろう。

頷きもせず視線は野盗に向けたままだ。

「イナさんのスピードならなんとかなるはずですよね？　ロメ

リアに危害が及ぶ前に……」

「あやつが私たちから目を切って背中を見せたら……それも可

能じゃろうな」

「よかった……」

「しかし、私は動かぬ」

「えっ?!」

イナさんのものとは思えないセリフに、あたしは言葉を失ってしまった。

何よりも正義感の強いイナさんがそんなことを言うなんて、まったく思いもなかったから。

「あの子が助けを求めている相手は……シノ、おぬしじゃ」

ロメリアを見ると泣くのを必死に堪えながらこっちを見ていた。

いや、正確にはきつと見えていない。でも、その視線の先は間違いない。あたしに向けられていた。どこまで見えているか分からないけど、確かにあたしを見ている!

ロメリアを助けてあげたい。でも、あたしの實力じゃ……

「それでロメリアにもしものことがあつたら……」

「愚か者。それでは何も守れぬ。何も成せぬぞ」

ロメリアに何かあつて欲しくない。

あたしの足じゃ間に合わないし、正面から水御華を使って水を出すにも間があつてバレバレだ。

だからイナさんが助けるのが一番確実な方法だと思った。

それじゃいけないだろうか……

「でも、あたしじゃ……」

「成せるものを成せぬものと考えていては何も成せぬ。さつきもベゼルには到底敵わぬなどと考えておったのであるう?　そ

して今度はロメリアを助けられるのは私しかいないと考えておる。自分にはできぬと決め付けて、な？」

イナさんはすごい。本当にすごい。あたしが思っていることをピタリと当てていた。

でも、あたしの実力がその程度のものなのも、あたし自身がよく知っているんだ。

「おぬしは何のためにその刀を振るう？ おぬしが守りたいと思う心。それを叶えられるのはおぬしだけじゃぞ？」

「あたしが守りたいもの……」

「さつきは私を守ろうとしてくれたのであろう？」

あの時はイナさんを一人にしたくないと思ったんだ。

絶対に失いたくないから。絶対に守りたいって。無茶で無謀だって分かっていたのに。考える前に体が飛び出していったんだ。

「そろそろ誰かの剣（つるぎ）と成る時なのかもしれぬのう。私の前に飛び出し、野盗どもを薙ぎ払った時のシノは……今まで一番じゃと思っただぞ？」

イナさんはそう言ってあたしに笑いかけた。

その笑顔がどこかあたしを安心させてくれる。イナさんが言うように思うことができる。

でも、失敗は許されない。絶対に、だ。

「そろそろじゃな……」

野盗の男はかなり距離を取ったことを良しとしたのか。

イナさんの言うようにあたしたちから目を切り、背中を見せて走り出した。

「イナさん。あたし、ロメリアを助けたい！」

「ならばその剣と成りて今この時、そのためにのみ生きよ！ それこそが剣と成ることじゃ！」

「はいっ！」

あたしは水御華をギュッと握り締めて野盗の所へ駆け出した。――水御華。あたしに力を貸して！

数十メートルの距離を一気に駆け抜け、野盗との距離を詰める。

その差、あと十メートル前後で野盗はあたしに気づき、ロメリアに向かってショットソードを突きつけた。

「動くなっ！」

その警告を無視して更に間合いを詰める。

あたしが振る水御華はいつもより速く、新しく感じた。

野盗が今にもロメリアを刺し殺そうというのに。

あたしは何も恐れず水御華に身を委ねるように、刀を振るうことだけに集中していた。

「ぶっ殺してやるぞ！」

「そんなこと、させるもんかあああああ！」

切っ先から放たれる水が一条の矢へと姿を変える。

水の矢は野盗のショートソードを砕き、そのまま野盗の胸に突き刺さる。

更に間合いを詰めて刀を振り下ろし、野盗の腕を切断。ロメリアを解放した。

腕を斬られた野盗は悲鳴一つ上げなかった。

驚きの顔のまま、既に事切れていた。水の矢が胸を貫き、あたしが腕を両断した頃にはもう意識はなかつたのかもしれない。

奇しくも殺された野盗のおじさんと同じような顔をしていた。

「うむ。よくやったぞ、シノ」

「うわわっ！　びっくりした！」

いつの間にか、あたしのすぐそばでイナさんが微笑んでいた。何もしないとっておきながら、いざという時のためにあた

しと同時に駆け出してくれたんだらう。

やっぱり、敵わないなあ。

でも、あたしはそんなイナさんが好きだと思った。

「シノお姉えちやーん！」

ロメリアはあたしの胸に飛び込んできた。

すぐそばにはイナさんもいるのに、ロメリアにはちゃんとしたしだつて分かつてくれたんだ。

「ロメリア。大丈夫だった？　なんともない？」

あたしはロメリアを抱き締めた後、どこも傷つけられていないか体中を見回した。

「ふえ？　なんともないよお？」

さつきまで泣いていたのに、ロメリアはけろつとした顔であたしを見つめていた。

あたしが助けるって信じてくれていたんだ。

そしてロメリアは笑った。あたしが大好きなあの笑顔で。

「ごめんね。危険な目に合わせて」

「ううん。お姉ちゃんが悪くないよ。だって水の妖精さんだもんね！」

そうじゃないんだけどなあ。

でも、ちゃんと守ることができて本当によかった。

「ルルウー！」

「あれ？　ルル？　そんなところに居たの？」

ロメリアの服の中からルルが顔を出した。

女の子の服の中に潜り込むだなんて、とんだエロファルファだ。：：あ、ルルの性別知らないや。

「そっか。ルルはルルでロメリアを守っていたんだね」

「ルルッ！」

「ありがとー。ルルー♪」

「ルルルルく♪」

嬉しそうにルルに頬ずりするロメリア。

ルルも嬉しそうにロメリアの肩の上で動き回った。

くそう、なんかラブラブじゃないか。ルルのやつ、あたしにはあんな態度とったことないクセに！

「：：さて、これで一件落着じゃな」

イナさんの言葉にハツとなった。

街を見渡すと、未だ火の手が上がっていた。

このままにはしておけない。こうなったのもあたしに責任があるんだし。

「まだです。この街はまだ火の手が上がっている所があります。

このままにはしてられません！」

「ふむ。アレをやるのか？」

「はいっ！」

イナさんはあたしが何をやるのか、分かってくれているようだ。

それでも止めないのはあたしの気持ちを汲んでくれているからだろう。

あたしは戻って刀の鞘である沙華月を探した。

地面に転がる野盗たちの中からそれを見つけると、それに刀を納めておもむろに地面へ突き刺した。

そして力を込めて沙華月から水御華を抜き放つ。

「水御華よ。ここに雨を降らせて！」

普通の抜刀音だけが辺りに響き渡った。

その音からしていつもと違う。いつもなら水を含んだような抜刀音がするはずなのにそれがない。

いつもなら力を込めて抜刀した瞬間に、鞘の中から水御華の力が空へと飛び出して雨を降らせるはずなのに……。

抜ききった水御華からは水一滴すら出てこなかった。

そもそもあたしから水御華への力の流れがまったく感じられない。

「ふうむ。力の使いすぎか。肉体的疲労か。今日は少し頑張りがすぎたからのう」

「そんなっ！　今が一番必要な時なのに！」

ダンベルギアへ来るまでの砂漠の旅。

野盗のおじさんとの対決。

ベゼルとの息も詰まるような戦い。

そして大勢の野盗たちとの戦い。それらで水御華の力を使ってきた。

異能者として力を限界まで使ったから、水御華水の力を引き出せないのかもしれない。

あたしは再び水御華を沙華月に納めると、力を込めて柄を握った。それだけでぐらりと視界が揺れる。

「シノ……」

心配そうにあたしの肩に手を置くイナさん。

それに対し、あたしは笑顔で応えた。

「大丈夫です。これはあたしが決めたことだから」

「……うむ。ならば何も言うまい」

ロメリアはクイクイツとあたしの裾を引っ張った。

「お姉ちゃん。大丈夫？」

「うん。雨が降るように水の妖精にお願いしてるところなんだ」

「すごい！」

「だから少し離れていてね？」

「うんっ！」

イナさんと共にあたしから離れるロメリア。

ロメリアの肩に乗るルルのほうを見ると、物を言わずにあた

しを見つめていた。

「よく分からねえが。頑張れよ」

「おじさん……」

ポンツとあたしの頭に手を置くおじさん。

こんなに人から応援されたのは初めてかもしれない。

この街の人たちはあたしを拒絶した。

でも、野盗と騒ぎを起こしたのはあたしだ。ちゃんとやり遂

げてこそ、イナさんのような剣に成れるんだとあたしは思う。

——だから頑張らなくっちゃ！ ここにいるのみんなのため

にも！

「お願い水御華。力を貸して！」

再び水御華の柄を握った。

あたしの中にある力、異能の力が柄を通して刀の中に吸収さ

れていく。

ぐらりと視界が歪む。力の流れと共にあたしの意識も遠くな

っていくみたいだ。

まるで体の中の力という力が水御華の中に吸い込まれていく

みたい。

はらりと落ちたあたしの髪の毛も、生気を失ったように色が

抜け落ちていた。

それでも、この手を放すことだけは絶対にしたくなかった。

あたしはどうしてもこの地に雨を降らしたいんだ！

「水御華、水御華、水御華ああ！ 応えてっ。あたしに！」

何度もその名を叫んだ。

その瞬間、水御華と沙華月からまばゆい光が放たれる。

あたしはここぞとばかりに水御華を沙華月から一気に引き抜

いた。

ゴツバアツという音と共に、鞘から水がこれまでに無いほど

溢れ出した。

「この地に雨を降らして！」

鞘の沙華月から『力のある光』が勢いよく飛び出した。

それは空へと翔上っていき、パーンという激しい音と共に

弾け飛んだ。

強く陽の射す青い空に、キラキラとした光が散りばめられる。

「……ふえ？」

ロメリアは両手を広げて空を仰いだ。
ポツポツと空から雫が落ちてくるのが分かる。

「雨だ！ 雨だよ！ 雨が降ってきたよ！」

嬉しそうなロメリアの笑顔を見て、あたしは膝を付いた。
いつの間にそこにいたのか、イナさんがあたしの背中を支えてくれていた。

「よくやったぞシノ」

「えへへ：：ちよつと、疲れ、ましたけど、ね：：」

イナさんは誇らしげにあたしを見てくれた。

雨は次第に強さを増し、あたしたちを濡らしてくれた。

街を覆っていた煙も次第に薄れていくのが分かる

そしてこの雨がこの地の恵みとなってくれるだろう。

——ありがとう、水御華。また助けてくれたね。

あたしは水御華を納めると、キユツと抱くように握り締めた。

「さあ、このままでは風邪をひいてしまうぞ。宿に入ろう」

「そうですね。——あ、でも：：あたしは宿屋には入れないんですよ。異能者だから——つて、ええっ？！」

宿屋のおじさんはあたしを肩に担ぐと、すたすたと歩き出してしまった。

向かう先は宿屋の入り口だ。

「お、おじさん？！」

「暴れんじゃねえ！」

「でも、あたしは異能者で、この街にも迷惑をかけたんだよ？」
後から付いて来るイナさんに額をペチンと指で弾かれた。

「いったあ！ 何ですかイナさん？」

ヒリヒリする額を押さえながらイナさんに抗議すると、イナさんは楽しそうに笑った。

「おぬしが何者であろうと関係なからう。のうブレン殿？」

「あ、ああ。お前は宿屋ダンベルギアの客じゃない。ロメリアの客だ。文句があるヤツは全員、俺がブン殴ってやる！」

フーンッ！ と、大きな鼻息を吐くおじさん。

その顔は見えないけれど、耳が真赤になっているのは後から見てもわかる。

「お姉ちゃん！」

「ルルルッ！」

嬉しそうにあたしを見るロメリアとルル。

———そうか。あたしのことを見てくれている人がいるってこんなに嬉しいことだったんだ。

チリチリと日差しの強い空。

そこに降り続ける雨のように、あたしの中で何かが潤いに満たされていくのを感じた。

▽△

あれからあたしはおじさんの宿屋に泊まった。

次に目を覚ました時、既に昼を過ぎてしまっていた。

体の疲れはほとんど残っていない。むしろ長旅で溜まった疲労がどこかへ飛んでいった気分だった。

あたしはなんとなく部屋のベッドの上でだらだらと過ごしていた。

外は相変わらずの青空。

いつもの強い日差しも、振り続ける雨によって遮られていた。今では降り始めた時よりも穏やかな雨が続けている。

あれだけ力を酷使した後に雨を降らしたのは初めてだった。いつもなら三日ほど振り続けるけれど、この雨はどれだけ続くのかな？

「ありがとう。水御華」

立て掛けてある水御華を手にすると、ぎゅっと抱き締める。水御華は何度も何度もあたしに力を貸してくれた。これからも、きっとそうだよね。

あたしはベッドから降りると水御華の柄に手をかけた。
「スウ：：」

鞘である沙華月から水御華をゆっくりと引き抜く。すると、いつものような独特な抜刀音は鳴らなかった。

ただの刀と同じ音を響かせていた。

そして水御華からは一滴の水すら零れなかった。

「ちよつと無理させ過ぎたかなあ？」

ぽりぽりと頭をかきながら誰に言うでもなくそう呟いた。

異能者としてのあたしの力。それがカラッポになっているからだろうか。

今は水御華から水を引き出すことができないでいる。

それとも水御華の方が水不足なんだろうか？

実をいうとその辺りの構造がよく分かっているんだ。

刀から水が生まれる原理。それは父さんだけが知っているのかもしれない。

水御華を沙華月に納めて後のベルトに提げた。

いつまでもこうしてはいられない。何よりもお腹が空いた。ぐるぐるるるる。

ホラ。お腹空いたなんて考えたならこれだ。この音はルル顔負け。いや、あたしの方が大きいかな？

そんなことを考えながら部屋を出た。

すぐそばの階段を下りて一階のラウンジへやってきた。

カウンターにはイナさんとロメリアが並んで座っていた。

カウンターの向こうには宿屋のおじさん。イナさん相手に鼻の下が伸びているのが分かる。

「おはよう、シノ。よく眠れたかのう？」

イナさんの言葉にロメリアはハツとなってあたしの方を見た。たぶんこの距離だと人影程度にしか見えていないんだろう。

それでも、ロメリアはあたしと知るととびきりの笑顔を向けてくれた。

「シノお姉ちゃん！」

「おはよう。みんな」

あたしはイナさんの隣に座るとその頭を撫でた。そして再び窓の外に目をやった。

陽の射す空に振り続ける雨。そこに架かる大きな七色の虹。

あの虹はロメリアの目に映っていないんだろうな。さすがに本物の虹を近くで見るとはできないし……。

「お姉ちゃん。外に虹が出てるの？」

「あ、……うん。ロメリアも知ってたんだ？」

ロメリアの言葉にどう反応しているのか分からなかった。

へたなことを言えばロメリアが傷つくと思ったから。

「ふえ？ みんな言ってるよお。お姉ちゃんが見せてくれたみたい、綺麗なんだろうね」

あたしは腰の水御華を掴んだ。けど、すぐにその手を放した。今のあたしには水を出すことができない。

そもそも今の環境で虹が出る保障もないんだ。

それにきつと、ロメリアが見たがっているのは空に架かる大きくて美しい虹のはずだから。

「虹って凄いいね。どうしてあんなにキラキラしてて綺麗なのかなあ？」

「ロメリア……」

「もしかしたら世界で一番綺麗なものなのかもしれないね！」
無邪気に話すロメリア。救いなはその言葉に悲しみや妬みがないことだ。

ロメリアはその目で虹を見たいと思っている。

ここにはそれはそれも叶わない。けど、あたしと一緒に旅をすれば目が治る可能性も出てくる。

あたしはおじさんを見た。おじさんはじつとロメリアを見つめて動かない。

おじさんはロメリアと一緒に旅に出ることをあたしに頼んでくれた。あたしもそうしたいと思っている。

……でも、ロメリアは？ 当人であるロメリア自身はどう思っているんだろう。

おじさんはあたしの視線に気づくと大きく咳払いをしてみせた。

「ロメリア。そのお姉ちゃんと旅に出てみないか？ お前の目を治せる異能者——いや、人間がいるかもしれないぞ」

「え、なんでえ？ わたし、今のままでも幸せだよ？」

「でもよお」

「どうしたのおじさん？」

「いや、俺は……」

目の不自由なロメリアがどうしてこんなにも気持ちのよい笑顔ができるのかと思っていた。

それはロメリア自身がちつとも不幸だなんて思っていないからなんだ。

普通に目の見えるあたしにはロメリアのような笑顔はきっとできないだろう。

ロメリアも自分の視力が確実に失われていることを気づいて

いるはず。

それでも幸せでいられるのは今の生活を大事にしているからだ。だからロメリアは不幸だなんて思わないだろう。

ただ、それは今よりも目が不自由にならなければの話だ。

考えたくないけど、ロメリアなら失明してもきっと元氣だと思ふ。けれど、それでも今の笑顔はきつともうできない。

今よりもできることが確実に失われたロメリアが、今のような笑顔ができるはずがないんだ。

ロメリアの失明。それはロメリアの本当の笑顔を失うことにも繋がってしまう。

一緒に住んでいるからこそ、おじさんも気が気じゃないんだろうな……。

やっぱりロメリアのことをちゃんと考えている。ロメリアの言うとおりに、優しいおじさんだよ。

「のうロメリア。おぬし、虹を見たくはないか？」

イナさんは空のコップをロメリアの頭の上に乗せた。すると、ロメリアは楽しそうに頭の上のコップを掴んだ。

「うんっ！ 見てみたい！」

「こら、コップで遊ぶな」

「おぬしのおじさんもそうじゃ」

おじさんが取ろうとするコップを、イナさんは人差し指で奪い取る。自然とおじさんの手がロメリアの頭の上に乗った。

イナさんはその手の上にそつと自らの手を置いた。

「ブレンおじさんも見えないの？」

「そうではない。ブレン殿はロメリアと一緒に虹が見たいだけなのじゃ。一人よりも二人の方が楽しそうじゃろう？」

「うん！ おじさんと一緒に見たいなあ」

「……ロメリア……」

ロメリアは頭の上に乗っているおじさんとイナさんの手を楽しそうに触れていた。

その手の上に、あたしも手を置いた。

「あたしも一緒に見たいな。ロメリアと虹を……」

虹を見たロメリアはどんな笑顔を見せてくれるだろう。どんなに喜んでくれるだろう。

おじさんもきっと同じ気持ちに違いない。

「行ってこい。俺も付いて行ってやりたいが、宿屋をやめるわけにはいかねえ。なあに、お前が居なくてもなんとかやっていけるさ」

「ブレンおじさん？」

「見たいんだろ、虹を。こんな世界だ。虹なんて滅多に拝めやしねえ。ろくでもない世界だが、虹くらいは見れたっていいじゃないか。そうだろ？」

「おじさんの言うことはムツカシイよお」

ふうくと頬を膨らませるロメリア。おじさんは困ったように頭をかく。

それを見てイナさんは笑っていた。

「あつはつはつはっ！ 確かに、ブレン殿の話はロメリアにとつてはムツカシイものよのう」

「…：悪かったな」

「単純なことじゃ、ロメリア。シノと共に旅をして、新しい世界を見てくるといふことじゃ。その中で、自らの目を治すキツカケも見つけるじゃろう。目が見えるようになったらここに戻ってきて、ブレン殿と虹を——」

「イナお姉ちゃんもムツカシイよおく！」

「なぬ？」

またもやふうくと頬を膨らませて抗議するロメリア。

そんなやりとりにあたしは笑ってしまった。

「あははは。さすがのイナさんもロメリアには形無しかあ」

「こりや、シノ。笑うでない！ おぬしにも関わることじゃろうに！」

「ごめんなさい。じゃあねえ、ロメリア」

「うん？」

あたしはロメリアの手をとった。ロメリアはきよとんとした顔であたしを見つめている。

「あたしと一緒に虹を見に行こうよ！」

「虹を見に行くの？」

「そう。ロメリアの目を治す方法を探しながらね」

「……見つかるかなあ」

フツとロメリアの顔に陰りが差す。

ロメリア自身も目に対する苦悩は持っている。こんなに小さいんだもん。普段は見せないけど、思うところはあるよね……。

「ルルルルッ！」

いつの間にかルルがロメリアの頭の上に乗った。

「あっ、ルルだあ！」

「ほらね。ルルも一緒に行こうって言ってるよ」

「そうなの？ お姉ちゃん、ルルの言葉分かるの？！」

「うっ……わ、分かるよ！」

「ごべちんっ！」

ルルの尻尾があたしの顔面をぶち叩いた。

「いたたたたたあ！ コラッ！ ルルッ！」

「ルッ！」

「適当なこと言うなって？ いいじゃん！ ここはそういうこととおいておいてくれればさあ！」

「ルルルルッ！ ルルッ！」

ぐるんぐると尻尾を振り回して威嚇するルル。一つ補足するならば、砂竜アルファアルファにあんな威嚇の仕方は無い。

「わかったわかった！ あたしが悪うございました！」

「ルルルッ！」

フンツと鼻息を出しながらふんぞり返るルル。これがアルファアルファの行動じゃないと補足するまでもないな。

「すごーいっ！ お姉ちゃん、ルルとお話してるー！」

「ほへ？」

どうしてそう思ったのかよく分からないんだけど……。

「あの、イナさん……？」

「プフウッ！」

イナさんはと言うとあたしと目があつた瞬間に吹き出していた。どこにそんなウケる要素が……。

「くふふふ。これじゃから天然は怖いのう」

「どういう意味ですか？！」

「まあまあ。とにかくルルもああ言っておるのじゃ。ロメリア

も一緒に旅をするといい。きっと楽しい旅になるぞ？」

「うん！ 楽しそう！ お姉ちゃんに付いていく！」

いやあく。楽しいばかりとも限らないんだけど……。旅ってそういうものだってイナさんも分かっているはずなんだけどもなあ。「待ってて、準備してくるから！」

イスから飛び降りると、ルルを頭に乗せたまま、ロメリアは楽しそうに走っていった。

「ロメリア……」

その後姿をおじさんはずっと眺めていた。

しばらく会えなくなるもんなあ。

「これでいいんだよな。奪い奪われ、盗人ばかりのこんな世界を。本当にロメリアに見せてもいいんだろうか。そう考える時もある」

廊下を見つめながらそう呟くおじさん。

気持ちちは分かるけど、それは誰もが目にしているものだ。ホント保護者してるなあ。

「ロメリアならきつと大丈夫であろう。幼いのにしっかりしておる。この世界に悲観することはあっても、絶望など決してしないであろう。ブレン殿はロメリアの帰る場所を守ってあげればよい。それだけで心強いものじゃからな」

「そうか……。そうだな。あんたに言われるとそんな気がする」

おじさんは安心したような顔でイナさんに笑いかけると、イナさんの空になったコップに飲み物を注いだ。

「帰る場所、かあ……」

あたしはそう、何気なく呟いていた。

「シノ？」

「……あたしにはないんだっけ。帰る場所が」

あたしは両親を失っている。住んでいた所も今じゃどこにあるのか、どうなっているのかすら知らない。

帰る場所が心を強くさせるといふのなら、あたしの心はどうなっていくんだらう。

「ここの名産だ。お前も飲め！」

おじさんはあたしの前にドカッと乱暴にコップを置くと、イナさんに注いだのと同じ飲み物を振舞ってくれた。甘い香りが鼻を通っていく。

「うちのは格別だ。飲みたくなったらダンベルギアに寄りな」

「おじさん：：ひよつとして励まそうとしてくれる？」

「フンツ！ 次は金を取るからなっ！」

おじさんはさっさと厨房の方へ行ってしまった。

あれだけ分かりやすい照れ隠しも無い。おじさんらしいと言えばらしいけど。

「帰る場所は無くともこれから行く場所は多かろう。まだ見ぬ知らぬ世界がきつとあるはず。旅とはそういうものじゃ。旅を樂しめシノ。樂しみは向こうからやっては来ぬ。ロメリアは樂しみのようじゃぞ」

「えっ？」

「聞こえてこぬか？」

あたしは目を閉じて耳を澄ませた。

聞こえてくるのは柔らかなで優しい笛の音色。

このダンベルギアの街に来た時あたしを迎えてくれたロメリアのオカリナの音色だ。

「どうじゃ？」

「うんっ！」

笛の音色はロメリアの心情を表しているのだろう。

期待と希望、嬉しさに樂しさ：：そういう感情がほの見えてくる。でもなぜだろう。聞いているあたしまでそんな気にさせてくれる気がする。

「あ。ルルの歌ってる声も聞こえる」

「それだけシノとの旅を樂しみにしておるといふことじゃ。もちろん私も含めてな？」

「——あっ！ また一緒に旅をしてくれるんですか？」

イナさんはコップを持ち上げるとあたしにもそうするよう目で促がした。それに習ってあたしもコップを手にした。

「しばらく付き合っつてやろう。おぬしは放っておくと何をしでかすか分からぬからのう。劍の腕もみっちり稽古してくれるわ」

「お、お手柔らかに：：」

「うむ。では再会を祝して——」

『カンパーイッ！』

コップとコップを交わし、あたしたちは盛大に乾杯をした。
まだ見ぬ世界。たくさんの出会いがあたしを待っている。
あたしはこれからの旅を、どう楽しむかウキウキしながら考
えていた。

楽しいなロメリアの笛の音に、心を弾ませながら……。

「ぶっはあ！ お酒だコレ？！」

「うむ。お酒じゃソレ！ この店の酒は格別じやのう」

グビグビツとコップの中のお酒を一気に飲み干すイナさん。

そんなペースで飲んでいるというのに、ぜんぜん酔った素振
りをみせていない。

「くふうく！ 美味い！ もう一杯っ！」

あたしのコップにまで手を伸ばすイナさん。

……そこも見習うべきなんだろうか……。

イナさんによって一瞬で空になるコップを見ながら、あたし
はそんなことを考えていた。